

上山市制施行五十周年記念—全国街道交流会議第三回全国大会

羽州街道・上山大会

開催報告書



主 催：全国街道交流会議 羽州街道・上山大会実行委員会

後 援：国土交通省東北地方整備局

青森県・岩手県・宮城県・秋田県・山形県・福島県・仙台市
社団法人 東北経済連合会
社団法人 東北建設協会
東北街道連携交流会議

共 催：山形県上山市

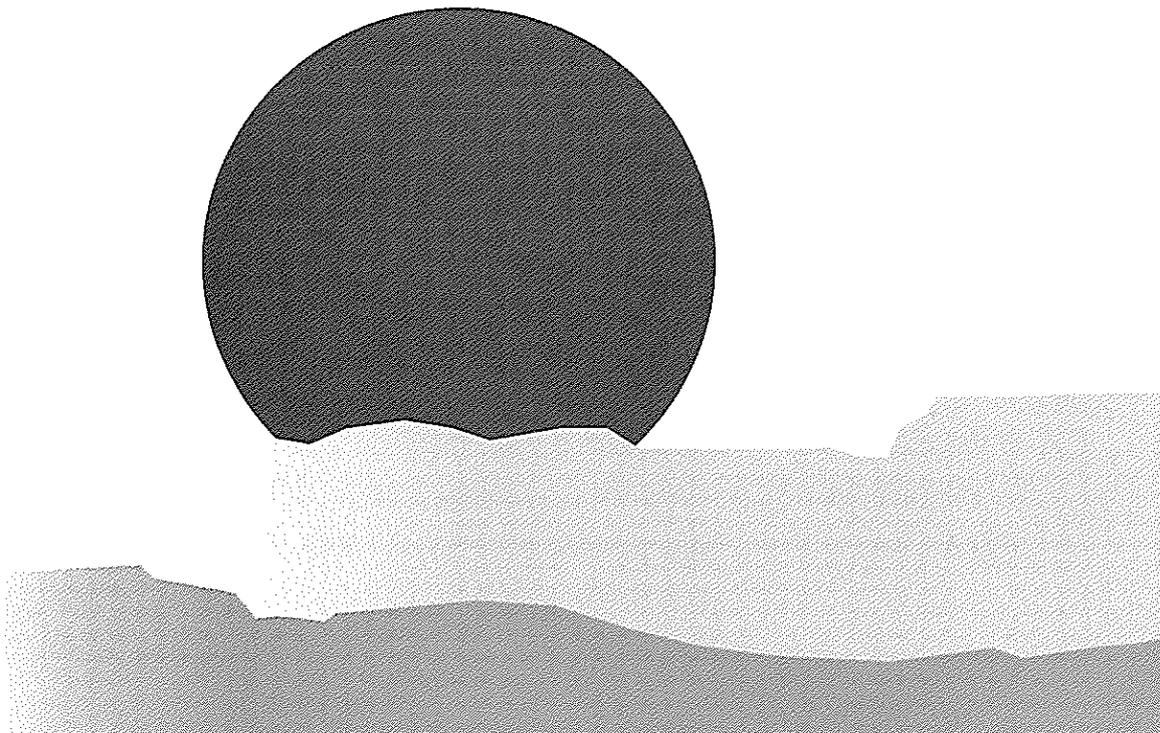
開 催 日：平成16年10月15日(金)～16日(土)

会 場：上山市体育文化センター

上山市制施行五十周年記念—全国街道交流会議第三回全国大会

羽州街道・上山大会

開催報告書



全国街道交流会議 第三回全国大会 羽州街道・上山大会を終えて

上山市制施行50周年記念事業として開催しました「全国街道交流会議 第三回全国大会 羽州街道・上山大会」が滞りなく、850名という多くの方々からご参加いただき、盛会裏に終了することができました。今大会のために、全国から駆けつけていただいた講師及び語り部と案内人の方々をはじめ、このような素晴らしい大会開催の機会を与えていただいた全国街道交流会議、そして国土交通省東北地方整備局並びに山形県と東北各県、実行委員の皆様方に心から感謝を申し上げます。

全国各地の参加者の皆様から、かつて松尾芭蕉やイザベラ・バードが旅した東北、「山の向こうのもう一つの日本」の今も受け継がれている文化を感じとっていただいたことと思っております。また、上山での語りを通して、全国とのネットワークを持ち帰っていただけたことに大きな喜びを感じております。

今大会には、上山市民はもとより山形県内からもたくさんのご参加をいただき、魅力ある地域資源の新たな発見も数多くありました。また、スタッフとして市内の団体、ボランティアの方々が多数結集し、大会を支え盛り上げていただきました。この取組みを通して、市民相互の連携の強まりと地域に対する自信と誇りの高揚が、これからの本市のまちづくりのエネルギーになるものと確信しております。

今大会を、本市のこれからのまちづくりの道しるべとするため、全国街道交流会議上山大会実行委員会として記念の桜を、斎藤茂吉記念館付近に植樹いたしました。

今大会の開催を通して皆様方からいただいた数多くの財産を大切にしながら、さらに交流と連携の輪を広げ、地域の発展のためまい進するとともに、全国街道交流会議を通して全国の方々の交流と連携が益々図られますよう祈念申し上げ、上山大会を終えてのあいさついたします。

平成16年12月

全国街道交流会議 第三回全国大会
羽州街道・上山大会実行委員会
実行委員長 阿部 實

開催内容

○オープニングアトラクション

~13:00

尺八演奏／尺八制管師 永井 栖鳳氏

○開会セレモニー

~13:35

主催者あいさつ 全国街道交流会議 代表幹事 田中 孝治
実行委員長あいさつ 羽州街道・上山大会実行委員長 阿部 實
来賓あいさつ 国土交通省東北地方整備局 局長 馬場 直俊氏
山形県知事 高橋 和雄氏

○基調鼎談

~14:00

テーマ：「山の向こうのもう一つの日本ー東北から日本を開くー」

語り部：赤坂 憲雄氏（東北芸術工科大学教授）
神崎 宣武氏（民俗学者、旅の文化研究所所長）

案内人：田中 裕子氏（フリーアナウンサー）

○分科会

~15:45

第一分科会 テーマ：「道でつなぐ、道で結ぶー街道から快道へ」

語り部：井戸 智樹氏（歴史街道推進協議会事務局長）
木村 宏氏（特定非営利活動法人 信越トレイルクラブ事務局 財団法人飯山市振興公社施設総括支配人）
賢木 新悦氏（特定非営利活動法人 秋田・岩手横軸連携交流会副理事長、北東北広域連携推進協議会会長）
案内人：柴田 洋雄氏（山形大学総合政策学科教授）

第二分科会 テーマ：「街道・宿場を活かした地域づくり」

語り部：高井 昭平氏（花巻文化村協議会常務理事兼事務局長、特定非営利活動法人 いわてNPOセンター理事長）
東田 雅彦氏（杉の雫吟醸の会事務局 諏訪酒造株式会社代表取締役社長）
島津 憲一氏（三宿地域連携協議会事務局長）
岡田 文淑氏（愛媛県内子町 八日市・護国町並保存センター所長）
案内人：宮原 育子氏（宮城大学事業構想学部助教授）

第三分科会 テーマ：「食文化と街道」

語り部：菅原 昭彦氏（「スローフード気仙沼」理事長、(株)男山本店代表取締役社長）
片岡 吉則氏（ぶり街道推進協議会 岐阜県高山市産業振興部観光課長）
渋川 恵男氏（(株)まちづくり会津代表取締役、(株)渋川問屋代表取締役、会津七日町通り町並み協議会会長）
案内人：高峰 博保氏（(株)クリエイティブ・グルーヴィー プランニング・ディレクター）

第四分科会 テーマ：「出羽(いでわ)、みちのく街道と旅人」

語り部：伊達 宗弘氏（宮城県図書館館長）
田口 昌樹氏（菅江真澄研究会 副会長、秋田市観光案内人）
西田 徹氏（山形県金山町教育委員会 教学課課長補佐）
アドバイザー：金坂 清則氏（京都大学大学院人間・環境学研究所教授）
案内人：村山 友宏氏（全国街道交流会議代表幹事、社団法人日本ウォーキング協会副会長 歩行文化研究所所長）

第五分科会 テーマ：「湯のまちづくり ～かみのやま温泉からの提案」

語り部：宇田倭玖子氏（湯ヶ島温泉 白壁荘 若女将）
橘 真紀子氏（秋保温泉 岩沼屋若女将、みやぎ女将会役員）
須谷 正代氏（北陸山中温泉 すゞや今日楼女将）
工藤 真理氏（かみのやま温泉 花明かりの宿 月の池 若女将）
案内人：三田 育雄氏（東北芸術工科大学デザイン工学部教授）

○分科会報告会

~17:25

○次期開催地紹介

○「東北の街道宣言」

宣言者：俳優 田中 邦衛氏

○全体交流会

~17:50

開会セレモニー



演奏／尺八制管師
永井 栖鳳氏



司会／上山まちづくり塾
小笠原 栄子

基調鼎談

イザベラ・バードやライシャワーを紹介しながら、これからの日本、東北のあり方について、充実したディスカッションがなされました。



分科会

それぞれの地域づくりや今後の課題について、道、街道という観点から活発な議論が展開されました。



第1分科会



第2分科会



第3分科会



第4分科会



第5分科会

分科会報告会

各分科会で交わされた内容を、案内人の皆さんに、簡潔にまとめていただきました。



次期開催地紹介



次回の街道交流会議の舞台からお越しいただきました、松山市の皆さんです。

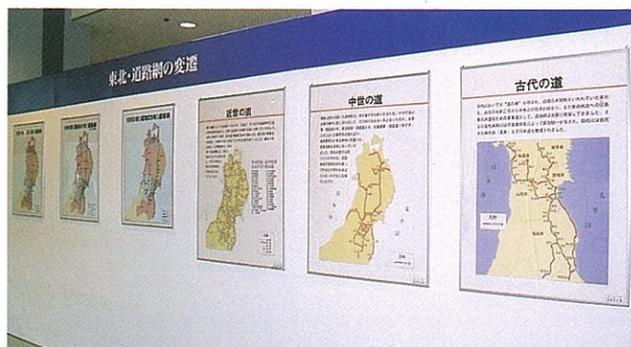
東北の街道宣言

俳優の田中邦衛氏をお招きして、東北の街道宣言が行われました。



パネル展示

羽州街道全体の解説をはじめ、東北の街道にゆかりのある、菅江真澄、松尾芭蕉、イザベラ・バード等のパネルが展示されました。その他、東北各県の街道風景や、歴史、道路網の変遷、民話等を紹介するパネルも多数並びました。



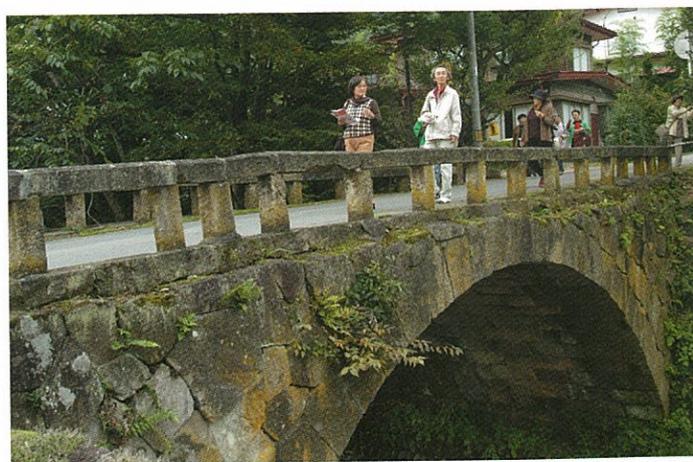
全体交流会



大会終了後、交流会が開かれ、そばや地酒など、地元の名物がふるまわれ、多くの参加者が交流を深めました。

現地見学会「湯ったりまち歩き」

大会の次の日、秋晴れの中で見学会が行われました。参加人数は154名。春雨庵や檜下宿・茂吉のふるさと金瓶、紅葉の蔵王を見学しました。



開会セレモニー

主催者あいさつ



全国街道交流会議 代表幹事

田中 孝治

2001年、徳川家康が東海道をはじめ五街道に宿駅制度を敷いてからちょうど400年になり、その後街道ルネッサンスという言葉で、街道の見直し運動が全国に広がり、今日に至っているわけです。

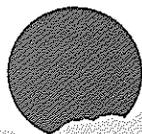
全国街道交流会議は2001年、道路元標のある日本橋で正式に旗揚げをしました。

今回は全国街道交流会議第三回全国大会羽州街道・上山大会ということで、「山の向こうのもう一つの日本」というテーマを掲げることになりました。これはライシャワー大使の言葉ですが、近代化された日本の違う一面、もうひとつの日本があるのではないかと。それを大切にしたらというのが、ライシャワー大使の言葉だったと思います。前夜祭でイザベラ・バードについての講演がありましたが、彼女も明治時代に日本を訪れ、この東北、山形を旅して、やはりここに本当の日本があると感動し、書物にも書き残してくれた。そういう意味で、東北という地域を見直すことによって、日本人が考え直さなくてはいけない、新しい日本を考えるヒントがそこにあるのではないかと。そこでこのテーマを掲げさせていただきました。

日本は単一の民族で、単一の言語で、全国どこへ行って

も同じというふうな見方もされるんですが、実はもう少し深く見てみると、それぞれのお国があり、それぞれの人があり、そこに文化があり、風土があり、自然ありと、実に多様性に富んだ日本の姿というのが見えてくる。それをつないできたのが街道ではないかと思います。そのため、例えば羽州街道だとか奥州街道とか東海道とか、土地の名前、土地の文化・自然がついた道というのが、いま注目されてきているのではないかと。いろんな地域、いろんな国を結ぶことによって、さらに多様な文化がそこに生まれてくる。そのつなぎ役が街道ではないか。

主催者として、この大会が有意義なものになり、この会場で蒔いた種が、上山あるいは東北に、あるいは全国に広がることを期待して、簡単ですがご挨拶に代えさせていただきますと思います。ぜひ皆さん、楽しく有意義にお過ごしいただければと思います。ありがとうございました。





羽州街道・上山大会実行委員長

阿部 實

ようこそここ上市市に、全国各地から、文字通り北は北海道、南は九州から、このように大勢の方をお迎えできましたこと、大変ありがたく心から歓迎を申し上げます。全国街道交流会議も第3回を迎えたわけであり、羽州街道・上山大会とこのように銘打ちまして開催いたしましたところ、本当に多くの方々から、このように会場にお集まりいただきました。

上市市の生い立ちというのは、今から大体380年ぐらい前になるのだそうですが、時の殿様、土岐頼行公という方が、今のこの上山の街道の原型を作られた歴史があるようで、大河ドラマ「武蔵」にも登場いたしました高僧沢庵禅師が、紫衣事件で配流された町がここ上山なのです。その史跡、春雨庵が残っており、そういった歴史のある、今の町の原型が約380年ぐらい前にできたと、そのような記録のようです。

往時、この羽州街道は13にのぼる藩の参勤交代の要衝として栄えてきたというような歴史ある宿場町、もう540～500年になるような温泉町、そしてまた城下町、このような3つの顔を持ちました珍しい町ではないかなと、自負もしております。そしてまた、近世の大歌人、斎藤茂吉翁

の生まれた土地でもあり、秀峰蔵王山の山麓、裾野に広がります町で、おいしい米、サクランボ、ラ・フランス、そのような多くのおいしい果物の産地でもあります。そのような気候風土の中で、120年ぐらいになるんでしょうか、イザベラ・バードがここ山形を訪れ、上市市でも非常に感じのいい町だと。その時から300年ぐらい続いておった旅籠があったそうですが、そのような中で、温かみのある人情が育まれてきたのかなと、こんな思いをしておるところです。

上市市におきましても、市民と協働のまちづくりを柱にいたしまして、地域の特性を活かしながらまちづくりを進めております。今回、全国各地から、本当に指導的な活動を実践されておられます語り部の方、あるいは案内人の皆様、そしてまた皆様方、多くの方々、このように一堂に会しまして、この大会が開催されるということは、当上市市にとりましても大変に意義の深いことであると考えておるところです。

本当にこの大会が有意義な大会になりますように。どうぞみちのくと言いましょか、羽州街道の秋、今日明日、十二分にご堪能いただきまして、思い出の深い日になりますことを心からご祈念申し上げます。



国土交通省東北地方整備局 局長

馬場 直俊氏

本日、全国街道交流会議羽州街道・上山大会が開催されるに当たりまして、一言ご挨拶を申し上げます。当地方整備局では、東北の美しい山河や歴史・文化を活かしながら、安全で安心できる自立した経済システム等の確立を支援するため、強く美しい東北を、地域づくりの大きなテーマとして掲げ、河川、道路、港湾などの社会資本整備を展開しておりますが、とりわけ道路につきましては、地域づくりの重要な社会基盤として、各地域の皆様方と一緒に整備を推進しているところでございます。

さて、東北地方の道づくりは、古くは中世に、現在の岩手県にございます平泉の地で栄華を誇った藤原清衡によって整備された奥大道から始まり、江戸時代の奥州街道や羽州街道、現在の4号、13号等の一般国道、また東北縦貫自動車道等の高速道路、さらに当地上山市を經由する東北中央自動車道の整備により、まさに街道の整備により時代時代によりまして、内容の変化はございますけれども、人的、物的、文化的交流が高まり、地域の発展を支え、さらに発展しようとしております。東北地方整備局では、交流基盤である道路整備を着実に進めることはもちろんでございますけれども、一方で、道路の働きや暮らしと道路の関わり

について、多くの方々に理解を深めていただくことを目的に、昭和63年に全国唯一の道路博物館であります道路資料館、ひらがなで「みちあむ」と言っておりますけれども、この道路資料館「みちあむ」を仙台市内に開設し、歴史街道に関する書籍の所蔵やパネル展示、みちのく歴史街道研究会と称した探訪会など、街道をテーマとした活動にも積極的に取り組んでいるところでございます。今後は、少子化等による急激な人口減少を迎えますわが国にありまして、東北地方をはじめ、全国各地の新たな発展のために、さらなる広域的な交流・連携による地域の活性化が必要であり、歴史、文化、自然などの地域特性を活かした、個性的で魅力ある地域づくりが求められているところでございます。

このような折に、街道の歴史や街道コンセプトを活かした地域づくりについて、街道に関心を持つ方々が全国から集い、情報や知恵の共有・交換をする全国街道交流会議が、ここ東北の山形上山の地で開催されますことは、誠に意義深いものがあり、東北におきましても、この上山大会を契機といたしまして、街道に東北の未来を開く新たな可能性を求めて、官民連携した取り組みを一層推進してまいりたいと考えております。





山形県知事

高橋 和雄氏(代理 山形県土木部長:池田隆氏)

本日、全国街道交流会議第三回全国大会羽州街道・上山大会が、ここ上市市において盛大に開催されますことを心からお祝い申し上げます。また、本大会に参加された皆様におかれましては、全国各地から本県までお越しいただき、心から歓迎と御礼を申し上げます。街道は人々が通り、物が流通するだけでなく、地域社会の文化も形成してきました。それが、都市化の進展やモータリゼーションの発達と引換えに、地域の個性が失われていきました。街道を通じて生まれた文化をもう一度見つめ直し、地域づくりに活かしていく取り組みが各地で行われ始めています。この取り組みを広げるために、どうか自由闊達にご議論され、全国各地の情報や知恵を交換し合い、この上山大会を交流の場として、有意義に活用していただきたいと思いをします。

本県では、美しく豊かで活力ある地域づくりを目指し、平成13年3月にアルカディア街道復興計画が策定されています。これは明治初期に山形を訪れたイギリスの女性旅行家、イザベラ・バードが山形の美しさをアルカディアと絶賛したことに由来しています。この時の感動を、いま山形を訪れた人々にも感じていただこうと取り組んでいるものです。上市市榎下宿では旧家庄内家の保存や、旧街道の面影を残

している新橋周辺の整備、また西川町では旧六十里越街道を復元する事業を展開し、地域住民と行政が一体となり地域づくりに取り組んでいます。本県は日本百名山の一つに数えられる月山や鳥海山など秀麗な山々、日本三大急流の一つである最上川など、四季の変化に富む、雄大で美しい自然に恵まれています。また、この時期はラ・フランス、りんご、ブドウなどさまざまな果物を味わうことができ、果樹王国山形とも呼ばれています。さらに、樹氷で知られる蔵王スキー場や上山温泉をはじめとする数多くの温泉地が県内にあり、年間を通して楽しむ、魅力ある観光資源に恵まれていますので、何度でも足を運んでいただきたいと思いをします。

テーマ：「山の向こうのもう一つの日本 ～東北から日本を開く～」



案内人：田中 裕子氏



語り部：赤坂 憲雄氏



語り部：山崎 宣武氏

○田中氏 今日の鼎談は、「山の向こうのもう一つの日本～東北から日本を開く～」という大変大きな題が付いております。まず神崎先生に伺いたいのですが、神崎先生は「道」について、子供向けの絵本も何冊かシリーズを出していらして、よく全国歩かれ、道のこと、街道のことを研究なさっていらっしゃいますね。上山・羽州街道に関してはどんな風に感じていらっしゃるのでしょうか。私と羽州街道ということ一言。

○神崎氏 西日本で生まれ育った私の場合、街道は交流の場だといっても、なかなか理解が及ばないところがあります。例えば、私、羽州街道もちろん歩いたことはあるんですが、冬を知らないんです。例えば、ロビーにも、古川古松軒がこの羽州街道を歩いた旅人の一人として展示されております。私と同じ備中の生まれの人なんです。それで、東北巡見使の一行の中へ入りまして細かな記録を付けてるんですけども、この人も、この羽州街道を歩いたのは紅花が咲く頃でありますから初夏ですね。特にこの辺りについての記述は、紅花が一面に咲いて大変美しい。それから水田には青々と実に広い面積に米が実ってる。こういう光景は西日本にはない。素晴らしく美しく豊かである—というようなことを書いております。古川古松軒は、はるかに昔の江戸時代、しかも歩きながら丹念に記録をつけている。そういう立場にいる人ですから、よく見るはずなんです。やはり冬にここを歩いたらどうだろうかということ考えると、今日のテーマは「もう一つの日本」ですけども、羽州街道の、もう一つの、半年間の表情がある。それがどうしても理解がなかなか及ばないというのが私のこれまでの実情です。

○田中氏 赤坂先生は東北学を極めていらっしゃるわけですが、山形

のみならず、東北を本当によく歩かれていらっしゃいますね。「羽州街道と私」でお話しいただけますか。

○赤坂氏 民俗学者としましては、街道で聞き書きというのはできないんですよ。街道というのはやはり、今で言えば車が走るようなそういう道というイメージがあって、どうも羽州街道について語れと言われると、とても困ってしまうんです。ただ、イザベラ・バードの「日本奥地紀行」を読みながら、今は会津をずっと歩いてますけれども、あるいは山形のこの羽州街道とかいろいろ、そういうの見ていることは確かですね。今の神崎さんのお話をお聞きしていて思い出したことがあるんですけども、僕が東北にやってきたのが13年前なんです。初めて車で東北を走り始めたんですけども、東京では考えられなかったのは、1年の半分ぐらい走ることができない道がある。つまり、雪に閉ざされてしまうと走れない道があるんですね。つまり夏の道と冬の道が全く姿を変えてしまう。これは西では絶対にあり得ないことだろうと思えますね。

○田中氏 風土といいますか、風とか土とか自然とか、そういうものが東と西ではだいぶ違うんだということ、そしてそれがそこに住む人たちに非常に影響しているんだということが、今のお話でも分かったように思います。実は今日の題の「山の向こうのもう一つの日本」という、今回のテーマにさせていただいてるのは、エドウィン・ライシャワーさんの文章の一つなんです。出だしでは、日本というのは全く違った二つの国から成っているという言い方をしています。一つは、巨大な工場とか切れ目なく続く都市、それから東京一帯から北九州まで続く高速道路。こういうものはあ

んまり魅力的じゃないとはっきり言ってるんですね。それは生活環境が制約されている。もう切り捨てるがごとくに書いています。自然自体も人間の圧力によって無慈悲にも脅かされてきている。ところが、このおびただしい主要地域と遠くないところに、もう一つの日本が存在するんだと言っています。それは果てしなく続く山脈だったり、大森林だったり、あちこちに点在する村や町のこと、そういうところで人々が非常に快適な生活をしている小都市がある。それが素晴らしいというふうにおっしゃってるんですね。これが日本本来の姿を思い出させる美しいところだと。

いま神崎先生からも、赤坂先生からも雪の話が出ましたが、ライシャワーさんはすごいことを言ってるんです。「私は、このもう一つの日本に属する山形を訪ねる時は、あえて冬を選びました。トンネルを抜ける短い路線は、私を太平洋側の乾いた地面とか太陽の眩しい空から、雪に埋もれた冬の不思議な国山形に連れてきてくれた。広大な自然の美しさに、さらに素敵な魅力が雪が加えてくれています。そしてこれが私の一番言いたいことなんですが、友人から日本でどこを見るべきか尋ねられると、私は決まって踏み慣らされた道から一歩外れてみるように勧めます」とライシャワーは書いています。そして「日本の歴史を残す京都や奈良のようなところも見逃せません。しかし、私は強く言いたいです。山形を良い例として、もう一つの日本を見落としてはならない。将来において自然と人間が健全なバランスを取っている、そのようなもう一つの日本に日本全体がなることを望みます。」こういうふう書いてるんですね。これにはいろんな捉え方があると思うんですが、神崎先生はこれをお聞きになってどんなふうに感じられましたか。「山の向こうのもう一つの日本」。

○神崎氏 本音で申しましょうか。その質問を山形でされたら、その通りだと答えます。それから長野でされても、その通りだと言います。つまり、いろんなところの街道から、いわゆる主要街道から外れた脇道というのがあり、そういう脇道というのがなぜ郷愁を誘うのか。郷愁だけじゃなくて、やはり日本のある原型があるんだろうと思います。すでに江戸時代に街道ができた時に、主要街道というのは相当な変化を見せてる。それに対して脇道は、踏み荒らされてない。つまり、人があまり通らない道というのは、それほどの変化が見られないということで、よりその土地、より古い形に馴染みなければいけませんか、それを見聞したければ、脇道へそれて歩けばいいということは、これはひとり山形の例だけで

はなくて、全国でそうだろうと思います。

当然中央の巨大な権力や、あるいは資本が投下されたところよりは、もう一つのそれが投下されなかった方が、われわれとしたら懐かしい風景に会えるというか、心落ち着く風景に会えるところのように思います。ですから、これは、どこでも汎用できる情景ではないでしょうか。

○田中氏 確かに、最初いただいた時は本当に山形にとって宝物だというふうに思いましたが、何度も何度も読んだり、いろんなところで使っていただいたりしているうちに、これはライシャワーさんの強烈なメッセージで、日本本来が自然と調和をして生きていく、山形だけ、東北だけにもらったメッセージではなくて、やっぱり日本全体にいただいた大事なメッセージだなどというふうに考えるようになってきました。この「もうひとつの日本」というメッセージをいただいて有頂天になっておりましたら、実は赤坂先生は「いくつもの日本」ということをおっしゃってるんですね。「もうひとつの日本」、「いくつもの日本」、どうも読んでいくと、オーバーラップするのかなという思いもします。その辺のところを、先生、どんなふうに整理なさって下さるのでしょうか。

○赤坂氏 規範となるというか、もう揺るぎない中心的なにか日本というものがあって、それをひっくり返したり、それに反旗を翻すためにもう一つの日本というふうに出てくる。でも、そうではなくて、実は日本列島にはそうした一つの中心、一つの日本があったのではなくて、いくつもの多様な地域文化が並び立つ形で存在したんじゃないか。それがいくつもの日本だというふうに僕は考えたんですね。

つまり、日本列島のどこかに中心があるという考え方を壊したかった。それで、いくつもの日本ということを出したんで、少し違うような気はしますけれども。

○田中氏 ちょっとここで視点を変えましょう。道というのは確かに人も往来しますし、物も運びますし、人間と一緒に情報も来ます。そういう意味では、素晴らしい舞台が街道だったというのは私どもうなずけるんですが、この街道を書き残した人、記した人がいないと、今の私たちには伝わってこないですね。そういう意味では、いい語り部が歴史の中に現れたわけです。そのイザベラ・バードしかりですし、さまざまな人がこの羽州街道を記しているんです。

神崎先生、古松軒、菅江真澄、かなりの語り部に恵まれてる方でしょうね、この羽州街道は。

○神崎氏 これも数えて比較したわけじゃないんですが、紀行文が多いか少ないかという、羽州街道全体ではそれほど多くはないと思います。ただ、この場合は旅の名人、達人とも言える人たちが書いてる。それによって、全国の人々が江戸時代にすでに認知をした。芭蕉がいい例ですけど、芭蕉という希代の旅人が、この奥州路を、あるいは羽州路を二句なり三句なり書いてくれるんですね。『奥の細道』というのは当時の大ベストセラーになりますから、版を重ねて重ねて、俳句が流行して、各地で句会ができるわけです。それほど全国的に広がるんですから、芭蕉の影響力は大きいですね。その芭蕉が『奥の細道』を書いた。その芭蕉の旅を、今度は追いかける人たちが出てくるんです。芭蕉が歩いた通りに歩き、それで芭蕉が詠んだところで風景を確認しようと。

○田中氏 何年か前でしたか、新婚旅行に奥の細道へ行こうと思うが、どこで泊まって、何日ぐらい掛かるだろうかなんて聞かれた時には、私も困りまして、お勧めしていいのやらなんやら。今度はイザベラ・バードのように奥地紀行の後をたどって新婚旅行なんていう人も出てくるかもしれない、皆さん独特のオリジナリティーを持って旅をする方も増えてきましたから。

それで、赤坂先生はこの間、旅行の雑誌をお出しになりましたよね。その特集でイザベラ・バードを取り上げてらっしゃるんですが、イザベラ・バードをたどって大分県内を歩かれたんですね。

○赤坂氏 芭蕉の歩いた道をたどった後の文人たちと同じように、僕もいまバードの歩いた道を、車を使ったり徒歩でとか、追体験してるんです。多分、僕だけではなくて、いまバードの歩いた後をたどりたという旅人たちが増えていると思いますね。いろんなところで出会いますし、そういう催しをやるとたくさんの方が集まります。バードは明治11年ですから、今から120何年前の人なんです。ですから、バードの日本奥地紀行を手掛かりとして、明治11年の東北の姿というのが生々しい形で見える。それを追体験しながら、あるいはいろんな文献とかも重ね合せにしながら読んで歩くと、本当にその時代の姿がリアルに浮かび上がってくる。多分、そういう楽しさというのがバードを追いかける旅の楽しさなのかなと思いますね。

○田中氏 神崎先生の旅の文化研究所所長というお立場からも、昔の追体験をしていく楽しさみたいなものは、最近はやはり増えているとお感じですか。

○神崎氏 増えているんだろうと思いますね。私は、今、韓国で人気になってる冬のソナタの撮影コースを回る旅もね、ある意味では追体験だというのが、先々週韓国へ行って感じられましたね。かつて日本が持ってた、日本人が持ってた表情、あるいは表現の方法というのが、韓国ではまだ追っかけられる。例えば、人を迎えた時の微笑み。いらっしゃいませ、こんにちはなんていうそういう掛け声じゃなく、なんとなく微笑みながらの会釈であったり。あるいはもっと韓国の場合強烈なのは、迷惑なら迷惑という表情が出る。そういう人と人との触れ合いが、多分、バードの世界にあったんじゃないか。なんとなくそういうことを追体験したいなという潜在的な期待感あって、人々は旅に出るんだということを感じましたね。

○田中氏 いいお話ですね。私も冬ソナも見ました。あまり評判なものですから見なきゃいけないだろうと思って。ちょっとはまりました。親に対する礼儀など、確かに私が子供の時には、あんなだったなというのが韓国に残ってたんだと。あんな息子が欲しいなとつくづく思いながら。恋愛一つにしても、非常に秘めやかな恋愛で、昔、日本人が持っていた懐かしやかな感じというのを、私たちはあそこに見つけてるのかなと思いました。そういう意味では、赤坂先生がバードの旅をすることは今を映し出す鏡だというふうにおっしゃってるのは、神崎先生のお話と合いますね。

○赤坂氏 確かに、バードの日記を読んでいて一番鮮烈な印象を覚えるのは、明治11年の日本人あるいは東北人の姿ですね。日本人ほど子供を可愛がる国民は見たことがない。ベタベタに可愛がるんです。大人に従順で。甘やかしてるからどうしようもないのかと思うとそうではないんですね。そういう子供たちの姿、あるいは親が子供に寄せる愛情、その姿というのは、多分普通の記録や文献の中には残されないものだと思うんですね。たまたま異邦人の女性の旅人が村から町を旅していて、その中で出会った姿を描いてるんですね。そういう意味で旅人の目というのは、土地の人にとって当たり前すぎて記録されないことを残してくれる、そういう貴重な証言になる。それは単に歴史や風景といったことの



証言ではなくて、もっと深い人間の心の在り方みたいなものが、そこに微妙な形で鏡のように映し出されているということなのかなと思いますね。

○田中氏 女の中から見た、それもある程度人生経験が豊富になった中年の女性から見た、東北の姿、母親の姿。バードの記録というのは私たちにとっては本当に大事なものです。私も、イザベラ・バードに少しでも近づきたいなどと思って、いましきりに、世界をほっつき回っているんです。先進国はなるべく歩かないで、開発途上国を中心に歩くことにしてるんですが、全然知らないところで、異国の人たちにぐるっと取り巻かれると、お金を盗られるんじゃないか、もっとひどい時にはズドンと殺されて終わるんじゃないかという恐怖心を感じる人が多いです。しかしイザベラ・バードは全くそういう思いがなく Unbeaten Tracks を歩いてくるというのは、日本の安全というのがしっかり分かってたんでしょうね。

○赤坂氏 バードは何カ所かで、日本ほど安全な国はない、安全に女が一人旅をすることができる国はないと書いています。もしかしたら、それはバードの旅をどこから守っていた人がいるんじゃないかというふうにも言われますけれども、それにしても僕はやはり安全な国であったということは確実だと思います。例えばバードは日光から会津を経て新潟に抜けるコースをわざわざ通るんですね。それは、実はある情報によって、その下野街道、西会津街道というのが大変な難所で、ただ、大変風景が美しいということが書いてあった。それを見て、そこをたどろうとするんですね。そしてバード自身は、この道は日本人すらほとんど通ったことがないというふうな言い方をします。でも、誰も足を踏み入れたことがないという言い方は実は誤りであって、そこは参勤交代の行列が歩く街道でもあったんです。実はバードが明治の初めに大変辺鄙な奥地を旅することができた背景にあるのは、近世にすでにできあがっていた交通のシステムなんです。それが明治になると急速に新しい交通システムに転換されていく。バードは明らかにその恩恵を被りながら旅をすることができている。ですから、全く未開の荒野を歩いているのではないということはいささか指摘しておいた方がいいかなと思いますね。

○神崎氏 バードが歩いたそれ以前の江戸時代に、もうすでに街道

交通というのは整備されてたというのは、私はその通りだろうと思います。ここで道と街道というのをね、ちょっと区別して考えてみたらどうかと思うんです。道はしんにゅうの「道」もありますし、旅路の路という「路」もあるんですが、これが中世までの記録には主流の書き方であって、近世になると俄然街道という表字が出てくるんですね。ですから、やっぱり近世の道とそれ以前の道がちょっと違うんだろうと思います。それ以前の道というのは、例えばあの世への道とかね、男の道とか女の道とか言うでしょう。つまり終着点が見えない。だから、出たら、いつ、どこで、どういうふうに連絡がついて、引き返すということも、ほとんど計算できない。万葉集でも何でも、旅に出るといって今生の別れというぐらいの覚悟を示します。旅発ちでは、悲しみを表す歌が多いですね。それが江戸時代になると変わる。なぜ変わるかということ、街道というのは起点があって着点がある。この2点をどう動かか、どう整備するかということでの街道。これは近世で始まるんじゃないで、私はもう一時代遡って、東海道に関しては鎌倉が定まった時点だと思っています。鎌倉と京都という2つの新旧の首都を結ぶ道として街道が出ます。しかし、一部やっぱり海沿いというか、船でつなげなきゃいけないところもありましたので、「海道」という字を書いております。江戸になると海道がなくなって、すべてこの街道になるわけですね。そうすると、この両点が定まることによって間も里数が決まってくる。ということで、旅の計画が合理的にできるようになった。しかも、江戸幕府というのは参勤交代のために街道整備をまずするわけで、国家的な事業として街道整備をするわけですね。街道整備というのは道の整備だけでなく、宿駅をほぼ等間隔に付けていく。そういう整備を国家事業としてするわけですから、それまでの時代よりはるかに旅が便利で安全になる。赤坂さんおっしゃる通りに、赤坂さんはバードのお話をなさったんですが、江戸時代にケンペルとかシーボルトとかフィッセルとか、そういうオランダ商館へ文官として派遣された人たちが、オランダ商館長の江戸参府の、その道中に随行して記録を書いております。そこで異口同音に、この国ほど旅人がおおらかに歩いてるところはないと言っている。江戸時代というのは、自動車、列車が使えないことの難儀さを除けば、人々が誠に快適には言いませんが、安全に旅ができた時代だろうと思うんです。それを助けたのが街道だろうと思います。

○田中氏 五街道などはかなり整備がされたわけでしょうが、羽州

街道の整備は、どうだったのかなと、インターネット使って調べてみて本当にびっくりしたことがあるんです。この話はしないつもりだったんですが、上山市ってパソコンで変換しようとしても出てこないんです。小さな町村でも大体地名は出てくるんですけど、上山（かみのやま）って書きますと「野」が入っちゃうんですね。しょうがないから上山市（うえやまし）で、上山と市と分けて出すんですが、これはもうびっくりしましたね。また、羽州街道（うしゅうかいどう）と入れると、羽集まる街道と出てきちゃうんです。えーっ、そんなに羽州街道というのはマイナーだったのかと驚きました。五街道以外、特に東北の街道、脇街道というのはそれほど整備されてなかったんでしょうか。神崎先生。

○神崎氏 いや、整備するとかしないじゃなくて、それに一番お金を掛けて、人手を掛けて、ほぼその時代としたら完全に整備をしたのが参勤交代道ですから。先ほど言いました国家事業的な整備ですから、非常に整備されてる。それから外れると、今度は藩の運営となる。つまり、今に置き換えれば県道か町道か。そうすると、藩ごとの財力、政治姿勢によって整備されたりされなかったりします。ということで見ますと、やはり国道整備に相当するのが参勤交代の主要道。しかし、大名行列が上り下りする街道というのは、それは世界でも当時褒められたぐらいの整備されたものであって、それよりは段階的に、現在で言う県道あるいは町道、村道というのが、その意味では整備が手薄になってくるということじゃないでしょうか。

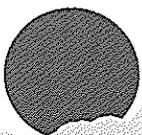
○田中氏 そうすると、上山を通過していた藩というのは13あったそうなので、中にはやはり佐竹藩とか津軽藩も通ってたわけですし、庄内の酒井藩も通ってたわけで。それなりにかなりの整備がされていたわけですね。また、この上山というのは、ちょうど米沢街道の分岐点でもありますから、この東北の中ではかなり賑わった宿場だったと考えてよろしいんでしょうか。

○神崎氏 もちろんそうですね。それから旅籠数でも、大体旅をする人たちの往来の人数はほぼ見当がつかますからね。旅籠が、これはもう中宿、本宿で相当違いがありますけれども。例えば本宿で平旅籠を基準にして30以上ぐらいになると、大体1日300人ぐらいまでの収容ができるわけです。それに中宿を一つ加えて1日500人ぐらいの宿泊者があり、その他近距離の通行や木賃宿泊りや野

宿の旅人もあるとして、その倍ぐらいの人が絶え間なく往来をしたと考えると結構な人数じゃないでしょうか。といっても、先ほど言いました農閑期に限ってのこと、農繁期の真っ盛りは無理だから春先、秋口というあたりに集中して、かなりの人がその時期に動いてた。東北地方では奥羽街道と羽州街道は双壁の街道だった。その中の、ここはまた特別な、さっきおっしゃった米沢街道との分岐点。正確にはちょっとずれますけれども、分岐点ということで大きくクローズアップされていい場所だと思います。

○田中氏 旅というのはやっぱりその日の天気、今日のようなお天気だったか、あるいは嵐だったかによっても違いますし、自分が風邪引いてたかによっても気分が変わりますね。この上山ではイザベラ・バードも大分気分が良かったようですね、赤坂先生。

○赤坂氏 とても良く書いていますよね。バードの日記を読む時に、その村、その町のことを良く書いてるか悪く書いてるかというので、受け止め方が随分違うんですね。バードなんて絶対嫌だという村もありますし。でも、そのバードの日記を丹念に読んでみますと、天候、雨がザアザア降りてびしょ濡れになりながら、そしてバードは腰痛でしたから腰が痛くてしんどくて、道が悪くて、やっとたどり着いたところで、本当は旅籠がたくさんあるのに、どうも泊めてくれるところがなくてみたい。そういう時にはくそ味噌にしているんですね。ですから、旅人の精神状態とか、天候とかってというのは、やっぱり紀行文に相当影を落とすと考えた方が僕はいいと思ってるんですね。バードが13の峠を越えて、宇津峠を越えて置賜盆地を見た時、東洋のアルカディアだと。天気が晴れたんですよ。一気に晴れて、気持ちいい空気の中で見たんですね。あれがもし、あそここの峠越えも雨でびしょびしょで、ずぶ濡れだったら、あんなに手放しで喜べなかったかもしれない。さらに、そこをずーっと行って、羽州街道を三島通庸が直して、早坂新道というんですかね、今の13号線につながるような道に出た時の記述というのはとてもいいんですね。渡し場、川を渡って、北の方に来ると、大きな広い道ができていて。道の上へ電線が通っていて、人々が行き交っている。その人々を見ると、荷車を夫婦で裸同然の格好で前後で押していたり、学校帰りの子供たちがなにか並んで歩いてるとか。新しい開かれた道というのが文明に向かってね、すごく朗らかに肯定的につながってるというイメージがワッと開けて、そこでバードはなにがすごく近代的な道なのに、裸同然



の男や女が荷運びをしているみたいな、そのアンバランスさになんか頬を緩めてるといふか、なんかそういう感じがあるんですね。そしてずーっと歩いてくると、赤湯、上山を通過して山形。山形は当時新しい県庁もできて、どんどん区画、町の整備がされている。大変近代的な風景にたどり着くんですね。ですから、小国から米沢、置賜盆地に出るまでの悪天候の中のそのバードの悪戦苦闘が、ふっと開かれた時の感じというのがすごく僕なんか面白いんですね。ただ、紀行文というのはそういうところをきちんと読まないで、良く書いていた、悪く書いていたというところで、拒絶したり、手放しになったりというのはまずいだらうなと思いますね。

○田中氏 さっき、早坂新道の話が出てまいりましたので、山形を語る時には三島通庸の話は忘れてはならないんですが。ちょうどイザベラ・バードが来る9年ぐらい前でしょうかね、三島通庸が県令となって山形に次々に道や栗子トンネルなどを作ったわけで。そういうこととも重ね合わせて見ていくと、非常に面白い羽州街道の姿が見えてくるかなと思うんですね。

もう一つ、私、上山といえば、やはり私どもは茂吉を忘れてはいけないと思うんですね。14歳ぐらいで東京に出て、長崎や、ドイツで勉強して、東京青山で病院を開いていたという、その茂吉が非常にたくさん歌を残していますが、いつも原風景は、この山形・上山・金瓶に帰ってくるわけですね。私も山形に来ました時に、茂吉の歌を実感できるというのは素晴らしいことだと思ったんですね。茂吉ほど自然を愛して、自然を歌ってる歌人っているんだらうかと思うんです。例えば、マタタビとかアケビ、桑の実などの山のもの、カマキリ、ホタル、ミズスマシなどの生きもの。彼の歌には、そういう自然がたくさん出てくるんですね。草花、魚、何から何まで歌っています。「くるみ和えにしたるたらの芽、油炒りしたるたらの芽、山人われは」。この歌を見つけた時には思わず私も頬が緩んでしまいました。会場にお見えの方は東北の方が多いのでお分かりになると思うんです。おいしいですね。くるみ和えにしたたらの芽、油炒りしたるたらの芽。感受性を育てられた故郷というのに対するこの思い、やはりこれは東北にある素晴らしいさであり、これを発信していかなくちゃいけないんじゃないかなというふうに思うんです。

もう一つ、茂吉について言えることは、道についてたくさん歌ってるんです。「あかあかと一本の道とほりたりたまきはる我が命なりけり」という歌があり、教科書に出ていましたが、本当に

素晴らしいって若い頃思いました。去年でしたか、茂吉没後50周年シンポジウムというのが、この同じ場所であったんです。私は皆様と同じように聴衆の一人として聞きに来て、大変感動をしたんですが。その中で芳賀先生が、「みちと茂吉」というお話をなさいまして、みちの詩人だというふうに茂吉のことをおっしゃっておりました。その辺は赤坂先生、なにか付け加えていただくことはありますでしょうか。

○赤坂氏 茂吉と言うと最上川とか白き山とか、むしろそちらの方がイメージとして強いと思うんですね。そして、あかあかとこの歌でもそうなんですが、そこで歌われてる道は多分、人が歩く道、実際に足で踏みしめて歩く道だけではなくて、自分の人生がたどっていくその道でもあるし、あるいは道徳なんていうのも道が入ってますけども、人が生きるその価値観みたいなもの、モラルみたいなものも道という言葉には託されていると思うんですね。そういう意味で、道の詩人というふうに、もし茂吉について語ろうとするのであれば、そういう多様な道の開かれ方というのが見えてくるような語られ方がすると面白いかなと思いますね。

○神崎氏 私はまた唐突なこと申しますが、茂吉さんのことで少し関連して考えたんですけれどもね。故郷をたどる道というのがあるんだらうと。つまり、私たちは東京へ出ます、大阪へ出ます、海外へ出ます、そこへ住みます。それは今の世の中では自由ですけども、その一代は少なくとも生まれ育ったところを忘れない。やはりふるさとに向って歌を詠みたい、やがて帰ってみたいという気持ちがあるんですね。問題は二代目で切れてしまう。あるいは三代目で切れる。茂吉さんで言いますと、茂太さんのお父さんが出られたんですね。

○田中氏 茂太さんが息子さんですね。北杜夫さんも息子さん。

○神崎氏 茂太さんがですね、山形のお酒しか飲まれないんです。そういう人が山形出身の二代目で、山形びいき。茂吉さんの影響だらうと思うんです。茂吉さんが故郷へ絶えず便りを出す、あるいは帰る、歌う、そういう道をつけてるから、茂太さんはやっぱりお酒もつながる。地域興しというのはやっぱりそこから出た財産を、能力をもう一回どのように呼び戻して役立ててもらおうかということを考えないといけない。もちろん、赤坂さんや田中さん

のように、大変な能力、才能を持った方がこちらへお越しになって住み着いて下さる。結構なことなんです。結構なことなんですけど、そればかり期待してもいけないし、地元の方だけに期待してはいけない。リピーターというけれども、やっぱり移住した人そのもののリピート。これは大きな力になると思いますね。茂太さんをどのようにこちらで活用なさったか。それは知りませんが、あの方やっぱり熱い思いでこの山形の酒を飲まれてるんですから。それをこちらへ時々、やっぱり還元してもらおうぐらいのこと考えないと、と私は他人事ながら思うんです。

○田中氏 大丈夫でございます。昨日まで確か茂太先生、山形にお見えでございました。紅花会という山形応援団の会長さんでございますし、茂吉文化賞もでございますし。本当に山形にとってはなくてはならない人でございます。

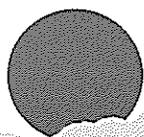
だんだん時間も迫ってきてしまいました。これから地域は自らが自分たちが作って行かなければいけないという時代になってきました。最後にですね、この機会でございますから、お二人の先生方に、どんなふうに私たちは考えていったらいいんだろうかというメッセージ、提言など伺いまして、お話を閉じたいと思うのですが。

○赤坂氏 またバードにかこつけてお話をさせていただきます。先ほど少し交通のシステムということをお話しました。バードの日記を、日記というか紀行を読みますと、どこの宿からどこの宿までは馬に乗ったとか、13時のあたりは割合牛に乗ったとか書いてある。実はその時期に越後の方からああいふ山道を歩くのに適した牛が入ってきて、馬から牛へ転換したりしているんですね。だからそういうのは、バードは良く見て記録してくれています。そして、すでに極めて整備された日本的な交通のシステムというのがそこに出来上がっているんだということを、バードの紀行を読んでいると教えてもらえるんですね。と同時に、例えば先ほど上山のもてなしの話が出ました。赤湯温泉を通るんですけれども、もう温泉中はどうもちょっと騒ぎでうるさくてたまらないということで、そこを通り過ぎて上山に来るんですね。そして、上山でバードは本当にゆったりとくつろぐことができた。多分、それは日本の温泉とか旅館の2つの顔だと思うんですね。みんなで羽目を外してどんちゃん騒ぎするのも一つの旅館の顔だし、もう一つはゆったり、それこそ癒されるような空間として演出される。そして上山でバ

ードが会ったのは、そうしたもてなしのスタイルだったんですね。バードはそこにとっても大切なことを3行ぐらい確か書いていたと思います。これは欧米的な、例えばもてなしとか旅館とか、そういうもののスタイルではなくて、極めて日本的な、そういう言葉使っていないんですけども、極めて日本的な、しかも洗練された形だというふうに確か言っていたと思います。とても大切だと思います。バードは紀行の至るところにそうした欧米的な価値観の物差しでは捉えられないような別の価値観、別の物差しによって作られている、例えば交通のシステムであるとか、あるいは旅館のもてなしのシステムであるとか、そういうものがあるということを引きちゃんと見ているんですね。そして記録している。だからこそ、われわれが自分とは何かとか、そういう問いの前で思い悩んで、とりわけバブルの崩壊からの10年の間は随分自信をなくしたと思うんですけれども。このバードは紀行を通して、われわれに120数年前の日本人の、あるいは東北人の生きざまといったことを見せてくれる。そしてそこには学ぶべきことが、もしかしたらたくさんあるのかもしれない。そういう意味で、バードは一つの小さな破れ鏡みたいなものかもしれないんですけども、足元にこそ豊かな地域の明日を作る宝物が埋もれているんだということは絶対に信じたいですね。そして、そのためにはバードの紀行であるとか、旅人たちが見たその土地の姿、その記録といったものも貪欲に、こちらが主体になって利用する、活用するということが大切なのかなというふうに思います。旅はいま旅をする人たちが主役ではなくて、旅人を迎える地域が、地域社会が主役となって旅が演出される時代に入りつつあるというふうに僕は思っています。

○神崎氏 意を強くしました。確かに旅人が思い勝手に、わがままに振る舞う、それが旅の成熟ではない。受け入れる側の成長、成熟が必要だというのは、私もその通りだと思います。

先ほど来申しておりますように、バードがこの地へ来た以前から交通制度が整ったということは、つまり街道交通の充実が江戸時代にあったということでありまして、私はこの江戸の街道というのをですね、もうちょっと日本人として見直さなきゃいけないと思います。江戸の元禄のあたり、大雑把に言いますが、これは藩によって違います、地方によって違いますけれども、元禄のあたりで年貢の徴収率が逆転しております。元禄までは七公三民とか六公四民というのがごとく、作った米の半分以上を年貢で供出する。これ事実なんです。しかし、それが元禄から三公七民、四



公六民、これも藩によって違いますけど、そういう逆転現象が生じる。つまり、元禄までの数十年間というのは国家事業としての城下町、あるいは街道の整備をしなきゃいけない。つまりハード事業に投資をしなきゃいけないんだから、それだけ年貢取らなきゃやれないんです。その整備が整った後では、今度は年貢はそれほど必要ではない。ソフトウェアに転じたとは言いませんけれども、徴収率は明らかにそれを物語っております。というようにところで、参勤交代が動き出している。その後、安全に旅ができるということで小銭を持った民百姓たちも旅に出るようになる。その主要な街道を使ってこの地からも伊勢まで、人口比にすると全人口の10分の1とか20分の1、全国的には10数分の1ですが、そういう人数が1年に1回は伊勢参宮をしてるんです。いずれにしても、われわれの祖先が、ごく一般の庶民がそれだけの旅をしてる。それを助けた街道が江戸時代に作られたという歴史を、私たちはもうちょっと誇りに思っていいたらいいと思います。貧しい江戸時代というイメージだけではいけない。ですから、赤坂さんも東北、日本が稲作国家の末端にあって貧しかったというイメージを、赤坂さんなりに転換なさって、それを学問の世界で表現なさってるんで、私は敬意を表して意を強くするんですけども、そういうもう一つの日本があります。もう一つの江戸時代というのがあります。そうすると、その江戸時代をなんで象徴させるかということ、一つの象徴は街道だろうと思います。

もう時間がないから、具体的にホラを吹いておきます。街道のどこかを世界遺産の登録まで高めていきませんか。街道をいかに使うか、いかに旅を楽しんだというテーマをそこへ集約することで、私は日本の街道は、近世の街道は世界遺産の登録の資格があると思います。そうすると、どこを残すか。これは地元、ここへ来たからよしよするものではありません。やっぱり檜下から金山峠のあたりが、もし整備をする意見がまとまれば、私は世界遺産登録の大きな資源になりそうに思います。ただ、もう歴史遺産のノミネートの余席は日本にはしばらくないようです。熊野古道が登録されたのはご承知の通りです。次は鳥根県の大森銀山か岩手県の平泉かどちらかで、そういうことでしばらくウエイティングを掛けなきゃいけない。自然遺産の方はまだ日本への割り当て数が、余力が多少ありますが、歴史遺産は少なくとも7~8年から10年ぐらいいはちょっと指定が鈍ると思われま。登録が後回しになると思います。ですから、いいチャンスです。そういう時期を定めて、やはりこういう会議体で、あるいはこういう地

元の盛り上がりの中で、私は検討していくことが大事だろうと思います。

これは街道を残すわけではありません。宿場町を残すわけではありません。宿屋を残すわけではありません。私たちの参勤交代で始まった旅、それを私たちの先祖がその上に乗っかって安全に歩いた旅、その中に芭蕉もいる、古川古松軒もいる、清河八郎もいる。それに外国から来た人の目がちゃんと被って、後年にはイザベラ・バードが世界の中でそれを比較して位置づけをしてる。そういう文化を残す。そういう姿勢で考えれば、私はこの地で、こういう会議でもの申す一つの動機付けがあるのではないかと思います。

○田中氏 最後は本当に気分が、パーッと世界に開かれていったような気分の良さでございます。今日お集まりの皆様はいろんな思いで参加して下さいと思いますが、歴史というのは未来を開く道しるべと申しますが、道も未来を開く道しるべであろうと思います。今日のお話、これといったまとめはいたしません、いくつかそこにヒントがあって、それを皆様方がそれぞれにご自分の地域に持ち帰って考えていっていただきたいものだと思います。長い間ありがとうございました。

第1分科会

テーマ：「道でつなぐ、道で結ぶ 一街道から快道へ」



案内人：柴田 洋雄氏



語り部：井戸 智樹氏



語り部：木村 宏氏



語り部：賢木 新悦氏

○柴田氏 この第一分科会は「道でつなぐ、道で結ぶ一街道から快道へ」がテーマです。何を結ぶのが重要なのかな、と考えると、結ぶのは地域の歴史であり、文化、生活など色々あります。その意味でこのテーマは非常に難しいと思っています。今日は、具体的な活動の中で、それぞれの人が考えている道で何をつなごうとしているのか、何を結ぼうとしているのか、道にいうとつないだり結んだりできるように、道をどのように整備したいのかなという色々な視点からお話がいただけると思います。

○賢木氏 秋田県大曲市から参りました賢木と申します。私は今日は2つの肩書きで登場しています。一つは、NPOの秋田・岩手横軸連携交流会副理事長という立場です。東北の場合にはどちらかという、首都圏を中心とした縦軸が非常に活発でありまして、なかなか横の連絡がついておらず、当然道路や交流も少ない地点ですので、できれば地方分権、自立をめざすとすれば横軸は大切だろうということ。細かい内容については後でお話をしたいと思います。もう一つが北東北広域連携推進協議会会長。官民一体の組織で、県境を越えて広域連携をしようという会です。例えば産業廃棄物の問題とか、広域観光の問題とか。文化、伝統、芸術、デザインなどの活動をしています。よろしくお祈りします。

○井戸氏 私共は歴史街道推進協議会という団体です。個人会員、物産事業所さんが加盟しており、ふるさと小包など色々な事業をしています。

地域づくりのハード面ですが、過去十年間かけまして年間数カ所ずつ重点的に整備する地区を指定し、昨年度で50の地区を指定しています。ほぼすべての重要な歴史の場所は計画の見直し等を

含めて、歴史街道モデル事業に参画し整備を進めています。早くからやった場所については、ほぼ形が出来てきております。テーマを決めて、市民参加の智恵出しを含めてやっています。地区の歴史的なルーツに沿って広域的なイベント、共同ピーアールのことも実施しています。たとえばイベントを順繰りにやっていく、携帯電話の写メールでインターネットに接続できるようなこともやっています。共同事業のメニュー出しとしては、歴史街道i(あい)センターと呼ばれるもので、あるまちに行って他のまちの案内が受けられる、外国語でも資料が入手できるという案内所のネットワークです。あまりお金を掛けずにできることについてはどんどんやっていこうというスタンスで活動をしています。

○木村氏 長野県飯山市から参りました木村です。私の職場は、なべくら高原森の家という施設です。都市と農村の交流を園りつつ、色々な地域資源を活用して、体験メニューを提供しながら地域の人たちとか県外からいらっしゃる方々に、我々の地域のことを知ってもらい地域活性化のための様々な活動をしています。

その活動を通じて、今回信越トレイルクラブというNPO法人が立ち上がることになりました。ブナを守る活動をしているうちに、道づくりに邁進していくようになりました。巨木ブナを見たいという人がたくさんいるわけですが、大きなブナだけがブナではないということで巨大ブナに集中する道を回避する道をたくさん作ってきました。これが高じて、関田山脈に道づくりをしようというのが我々の取り組みです。長野県と新潟県の県境にある山脈に道を作っていこうと活動しています。延長で80キロのうち今ようやく50キロ程整備がされてきました。整備といっても、木こり道で、街並みを通る街道とか、立派な一級国道とかそういうものではあ

りません。昔の人たちが歩いていた道、これを復活していこうと。少しずつボランティアの手を入れています。

○柴田氏 ありがとうございます。木村さん、行政区域を越えて一緒にになっているのは難しいなと思います。その辺りを教えられると、我々が活動する上でも色々参考になる部分があるのではと思います。井戸さんの話は、歴史があって積み重なってきたというのがポイントだと思います。多くの場合は、歴史があると積み重ねが多くなるんだけど、大きくなってほしい組織が硬直化するんです。それがまだ、これからまだやるということを知ったので、色んな工夫をされて組織をまとめていることをこの後にお話いただけるというなと思います。

今、3人の方々からお話をお伺いしたんですが、こういう活動をしているとき一番のエネルギーになるものは、やはり「俺はこういうことをやった、成功した」という自信だと思うのです。成功の話は皆さん活動する上で参考になると思います。では賢木さんから。

○賢木氏 私の方は道路を中心に行っています。道路というのは、私は地域住民として密着した道路が必要だろうと思っています。例えば安全安心というテーマですが行政に対して、昔、「道路を作ってよ」と鉢巻きをして言った場面がありましたよね。今はそうではなくて我々ができるものは何かと考え、宮古から秋田までの沿線で、各市町村で救急救命の講習会を5、6回開催しています。沿線住民としてできることはやろうよということです。また道の駅ですが、どこでも同じような感じですが、そこで地域に合った特徴がある道の駅をユーザー側から提案しようよと、東北道の駅ユーザーズクラブを立ち上げ私たちのNPOで担当してやっています。ネット上でいろんな情報が手に入ります。「東北の道でここがいいよ、悪いよ」というアンケート、アドバイスが有り難いと感じています。それを反映してまいりたいと思っています。

それから、歴史文化ですが一番大切なのは県境です。南部藩と秋田藩は今でも違いがあります。廃藩置県から136年経っているんですが、まだまだ境があります。その精神的な壁をなくさなければなりません、歴史的にはいいものがありました。例えば、藩政時代に秋田県にお助け小屋がありました。人が運んだ荷物を、ここの小屋で預かるんです。それをこっちから行った人がその荷物を持って行ってという、つまりお互いに藩が違うのに助けあっ

ていくんです。信頼関係はすごいなあとと思って、それは現代にも活きるだろうと思うんです。県境を超えた活動にはとても大切だと感じます。

○柴田氏 ありがとうございます。しかしこれだけの組織は活動力とボリュームが大きいですよ。井戸さん、これを維持するための工夫があったら教えていただきたいのですが。

○井戸氏 広域連携で何かをするというのは家を建てるのと同じです。まずどんな家にするのかというイメージがないと設計者も頼めませんし、アイデアが出ません。そういう意味でコンセプトをどうするのかということで、私共の場合は日本史の入門コースをつくらうというコンセプトを与えられました。

とにかくコンセプトを大事にして、あるものを実現するために連携する。連携はあくまで手段であると思います。家を建てるのと同じように「こんな家にしたいな」、次は「どこに建てるの」という話になります。そのときに、地域特性があるかと思えます。他人の芝生は青く見えるかもしれません。しかし我々の方からみると、山形県に月山がある、鳥海山がある。関西は六甲山ぐらいしかないんです。こんなにふんだんに温泉があるわけではない。こんなにまちづくりを頑張っている方が多いわけでもありません。自然は完全に負けています。その中で関西なら関西に合った切り口の作戦を立てて、みんなを参加させていくんです。とにかく、こういう斜面の所でこういう広さの中だったらこれでもいいかなという地域特性をまず考えることが大事です。そして、とにかくみんなに参加をしていただくことを毎日考えます。私共もまだ決して成功はしていませんで、とにかく歴史を扱うものから、10、20年で勝負はつかないと考えています。なんとか100、200年後にやっていて良かったねと言われるようにしていきたいと思っています。

○柴田氏 ありがとうございます。さて、木村さんの話で一番関心を持ったのは、80キロという道です。途中までできた道路はどのように出来たのか、残りはどうやって整備することを考えているのかを教えていただきたいのですが。

○木村氏 そもそもブナの巨木を守ろうということで道づくりが始まったわけです。ブナの巨木がある一角である山脈に道をつくる

ことで色々な効果が出てくるだろうと考えました。

関田山脈は一つの生態系と考えていますが、この生態系の中に勝手に行政が線を引いたものが幾つもある。13の市町村がかかわっていて、各々の行政区の中で色々なことをやっているんですが、その横のつながりはほとんどない。道づくりひとつとっても、例えばある町ではトレッキングルートをつくっていて、ある町では遊歩道をつくっていて、ある町では林道になっている。人間の勝手な線引きの中で、その生態系をくずすことを一生懸命やっている。これではだめです。地域に入って、13市町村のそれぞれの意見を調整する機関が必要だろうと考え、私が働いている第3セクターの森の家が事務局になって横の連携をとる活動を始めました。地域づくりを考える我々が両県にまたがったり、隣町に出かけていってもあまり違和感を感じられずに「あなたたちがやるなら我々も情報を共有していこう」という流れになってきて、NPOの活動に結びついてきました。

森の家という施設は都市の人たちが集まってきて色々な「体験」をしていくのですが、体験メニューの提供はどこでもやるようになってきました。そこで8年やってきましたが、それでは満足しない人が出てきたんです。もっと地域のことを知りたい。さらに、地域のことを知りたいという人が昔あったいい文化を取り戻そうという活動ボランティアとして参加するようになってきました。地域連携の気運とボランティアの力があいまって、2年間で50キロの道が拓けました。

鎌やチェーンソーを持って、いろんな人に声を掛けて徐々に進んでいったのが50キロです。まだルートがオープンしているわけではありません。来年の雪解けにはオープンしたいと思っています。

○柴田氏 みなさんの話を聞いていると、ヒントになることが沢山あるなと思います。こういう形で組織をいかに維持するのかということと、仲間の活動の成果をいかにアピールできるかが非常に重要だと思います。

道でつないで、道で結ぶというのは何かということ、それぞれの地域でそれぞれのものがあるなという感じがします。その時に抽象的な文化と言わないで、例えば森があったらその森を活かそうと。また道の駅があったらそれをいかに活かすべきかだと思います。

今回の街道も、昔の道とか山の道とか色んな道があります。それをどういう形で使うか、そのソフト、ノウハウによって道は生きてくるなあとという感じがします。いままで道は無駄だとか何か

は考えなかったのではないかと思います。今回のこのテーマは、その何を結ぶのか、つなぐものは何というの基本的にはみんな考えなさいと。答えはみんなの身近な足下にあるんじゃないと思っているのではと思います。

それでは次にみなさんの活動を通して、道をつなぐとか、道をどう活用するのかという点について、ご自分の経験から提言してほしいと思います。賢木さんからどうぞ。

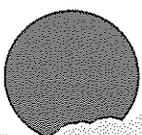
○賢木氏 連携をやってきていて非常に難しさを感じたことをお話しします。連携は手段ですが、幅がすごく広いんですよ。だから逆に何でも来いの世界なんですけれども、あまりにも幅が広すぎて。絞り込むというのが非常に難しいのです。行政の方の協力が非常に必要だと思っています。東北は、やはり官民が一緒になってやっていく地域ではないかなと思っています。

この間、東京の丸ビルの隣にビルができました。とても盛況だという話を聞いてまして、ますます地方と首都圏は差がつくなど。大阪の方だって、本社は東京に持ってきているでしょ。やはりそこには色んなものの集積があるんですよ。それで東北地方がそれと対等に、遅れないようにして勝っていくのは何かということ、東京でいくと一極集中な蓄積ですけど、私は平面的な蓄積ではないかなと思っていますよ。

例えば四国と岩手県が同じくらいの面積ですし、距離がギャップになってます。けれども、観光とか自然を含めた我々が非常に自信をもった大切な地域資源がありますよね。それを平面的なネットワークによったら、それがかなり蓄積になっているという、それを道路のネットで結ぶことが一番大切だと思うんですよ。ただ残念ながら、まだまだ完成に程遠く分断されているんですよ。最低でもネットワークだけでも作っていただかないと困ります。ただ単に高速道路がほしいとかそういう次元ではなくて、平面的な蓄積、それが非常に私は東京の縦の蓄積からすると、対等に戦える素材ではないかなと思っています。

○井戸氏 道の話をしきさせてください。これまでの話と関連する部分でいいますと、私共も古道、街道をもう少し活用しようと考えています。私たちは今、ステッカーを作って、北国街道はここからここまで通っているとわかるように、端から端まで、自分で歩いて貼っていくという作業を考えています。

次に提言ですが、広域団体でしか出来ない事業に、私共特化し



ているつもりでいます。広域団体でしかできない事業は、実は3つしかありません。一つはスケールメリットが出る事業。東北四大祭りのようにコンセプトがよければ、あとは皆でやりさえすれば情報は出ていくんです。それから二つ目はお互いにノウハウを活用できる事業。要するに、例えば青森県ならば八戸の屋台村なんていうのはとても進んでいると思いますし、岩手であれば遠野の語り部はすごい。秋田でいえばなまはげ館。それから会津であれば会津カード。商店街振興でいえば仙台の七夕もすごいと思います。このように各地域の進んだ部分をいかにお互いに使い合うか、或いは失敗の経験をいかに学び合うのか、そのようにお互いのノウハウをオープンにして、学び合うのが二つ目です。三つ目はそれぞれが少しずつ頑張れば、何かできるのではないかとこの部分です。

これを東北にたとえると、新幹線の駅各駅に歩くコースをつくる。例えば3キロぐらいで町を見せる工夫をする。例えば年に1回は順繰りにウォーク大会をやるとか、それをうまく組み合わせて、JR東日本にもっと宣伝してくれという話です。少しずつ頑張れば何かできる部分と、お互いにノウハウを学びあえる部分と、スケールメリットがでる部分。この三つに特化して、それを東北に当てはめればそんな話になるのではないかと思います。

○柴田氏 ありがとうございます。木村さんどうぞ。

○木村氏 我々はこれからまだやっていかなければならないことがあります。いま急いでいるのは道標を担ぎ上げることや交通機関や宿のネットワークづくりです。13市町村の中に500近い宿があります。

これを全部ネットワークする必要はないと思いますが、こういう気持で道を作っている。地域の人たちが地域の宝物として、地域の山を見直さなければならない仕事を宿の人たちも一緒になってやらないかという呼びかけをしています。

我々の活動をここで15分や20分間話してもきっと理解はされないとしますので、みなさんぜひ会員になって下さい。我々の活動が随時タイムリーにご報告ができるとと思いますし、何か一生懸命に一緒にやった気にはなれると思います。私の提言は「ぜひお手元に配ったハガキを書いて、ポストに入れよ」です。ありがとうございました。

○柴田氏 ありがとうございます。これまで色々な視点から道で

つなぐ、道で結ぶということは何をとということだったと思います。やはり地域のシステム、文化、暮らし。誰のためにというのは地域の住民のためだと思うんです。個性のある地域をつくりましょうというとき、それが交流だと思うんです。自分が他に行くと、自分の所がわかる。他の人が自分の所に来て色々しゃべると自分がわかる。つまり交流は自分を知ることはないかと思うんです。

日本はこれから個性ある社会をつくりましょうとっています。しかし、その個性はワンパターンではありません。きょうはもう一つの日本とか、沢山の日本がありましたけれど、基本的には多様性がこれからは価値になっていく。そうすると自分の所の個性は何だろうかということ、自分の長所を探さなければならない。そのために交流が必要だと感じます。ですから交流したからゴールではなくて、交流は地域を知るための出発点ですよ。その意味で道でつなぐものは自分たちの暮らし、自分の文化だろうけれど、何をつなぐか、誇りが持てるものは何かを見つけなければならない。だから地域にとっての鏡は交流です。鼻の頭が日に焼けて赤くなっているなんていうのは、自分では見えないんです。鏡があって分かる。交流をすることで、3人のお話にあったように、色々な苦労も楽しくなるのではと思います。活動するときに自分自身が楽しんでいると他の人も認めてくれる可能性がある。自分が楽しくないものについては誰も認めてくれないだろうと思います。そういうことで、この第1分科会の道でつなぐ、道で結ぶについての分科会を終わりたいと思います。

第2分科会

テーマ：「街道・宿場を活かした地域づくり」



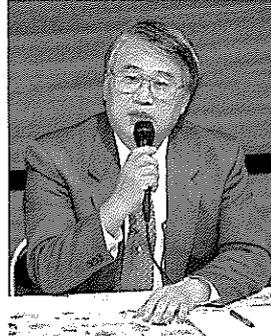
案内人：宮原 育子氏



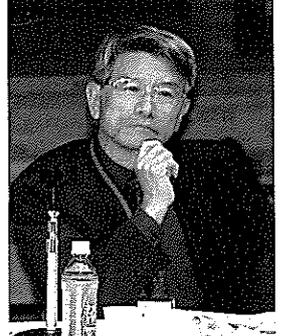
語り部：高井 昭平氏



語り部：東田 雅彦氏



語り部：島津 憲一氏



語り部：岡田 文淑氏

○宮原氏 第2分科会の皆様、こんにちは。私は宮城大学の事業構想学部で地域資源を活かしたまちづくりや、観光地の振興について研究をしております。今日は案内人を務めさせていただきます。

今、仕事場は宮城県ですが、週末は主人の居る山形県高島に戻っております。その移動経路で一番私が好きなのが白石から七ヶ宿へ来て、高島に入るという道です。街道には一定の間隔で宿場があって、距離が読めるというのがすごいですね。

今日は素晴らしい方達がお見えですので、まずは現在の活動について語っていただきたいと思います。まずは、高井さんからお願い致します。

○高井氏 こんにちは。岩手から来ました高井昭平といいます。岩手NPOサポートルームという県が設置した機関がありまして、そちらの方の室長をしております。それとはまた別に、岩手NPOセンターというNPO法人を独自で持っております、そちらの方でも、岩手県内のNPO活動の支援をしております。街道の話でいきますと、岩手県のグリーン・ツーリズムサポートセンターというのを立ち上げて、岩手県と一緒にやっております。豊かな自然と文化、自然の恵みをコーディネートして、岩手県を活性化していくことを考えています。

○東田氏 鳥取県八頭郡智頭町という所からまいりました、東田と申します。杉の雫吟醸の会という会の話をしします。私どもの酒のファンクラブが中心となって10年ほど前に発足しました。会のスローガンは、「酒飲み是水飲み。酒を飲むなら森を守ろう」。おいしい酒を飲み続けるために、おいしい水を守ろう。そのためにはまず、森を守らなければいけない。そして森を守る人の暮らし

まで守っていきたくないと活動をしてまいりました。

鳥取藩の藩主が最初に泊まる宿場町、智頭宿のど真ん中に、石谷家住宅という大きな家があります。これが3年ほど前に、一般公開されました。明治・大正ぐらいの町並みが非常に残っております。そういった町並みを使い、お客さんと呼んで、楽しんでもらって、その中で一緒に考えたいというような活動しております。

○島津氏 こんにちは。三宿地域連携協議会の事務局長という立場で来ております。三宿というのは宮城県の七ヶ宿町の湯の原宿、それから上山市の榎下宿、高島町の二井宿なのですが、これは湯原宿が宮城県になりますし、榎下宿が上山市、二井宿は高島町で、自治体も県も違います。県境、それから峠を挟んで、トライアングルみたいな関係にあります。ここの、最も力のある元気な方達に呼びかけて、三宿地域連携協議会をつくりました。

お互いに、この宿場街道で結ばれた3つの宿場の人達が、三宿は一緒なんだという意識をまず統一して、活動をスタートしております。それぞれの宿場には、オープンイベントがありますが、これにお互いに参加しながら交流を進めてきました。ですから、私達の活動は、別名「三宿交流」と言います。私達にはその交流を軸に、新たな地域文化を創造しようという大きな目的があります。

○岡田氏 皆さん、こんにちは。四国からやってまいりました。今日のタイトルは「街道・宿場を活かした地域づくり」ですが、それぞれの住んでいるところで、何とかしなきゃという思いから「地域づくり」という言葉が生まれてくる。そして今まで、お互いがたくさんの勉強をしてきただろうと思うんです。にもかかわらず、何故か、成果としてよく見えてこない。私も随分、その事に悩ま

されてきました。

役場の職員として、町の人達と長年付き合ってきたのですが、住民の皆さんは公的に肩書きをお持ちなんですね。肩書きのない人は、肩書きのある人に対して、例えば町役場から、色々な行政施策をご相談を申し上げる。そこで合意形成が得られ、それがまちづくりと称する施策になって、展開をしていくということになります。しかしそういった肩書きお持ちの方というのは、何故か2年経過するといなくなってしまう。それが、何故地域づくりがうまく進まないということの主な要因になっているのではないかと思います。そういった肩書き組の人達とは別に、肩書きのない人達と、私がいかに手を結ぶか。これは非常に難しいことなんです。

行政の側の人は、どちらかという、地域の皆さん方に対して、お金やものを与える側の人になっていると思います。与える側の人、それから受け取る側の人、そんなことが戦後50数年継続して、いつの間にか、ある種の行政に対する依存体質のようなものが定着してきた。まちづくりに対して、住民参加という言葉が、どこの町だって結構出てくるでしょう。住民参加という言葉は、言葉を返せば、行政が主体になるから住民参加という言葉が出てくるのであって、住民の皆さんが主体になるのなら、住民参加という言葉は、あり得ないと思います。そういう意味で、本当は、地域づくり、まちづくりというのは、地域の人達がいかに主人公になれるかということが重要だと思います。

そんな事を前提に、私の町の、ある山村の話ですが、色々な地域づくり事業の展開をしました。自分の地域は俺達の手で何とかしなきゃという思いに駆られる、肩書きのない人達がグループを組み、自分達のお金で、やりたい地域づくりに挑戦をしていくと。実はそんなことを、これまで十数年間ずっと継続をしてやってきて、やっと彼らが今、完全に自立をしました。これからあとの話題の展開の中でも、この町の事例を中心にお話をしていきたいと思います。

○宮原氏 東田さんの方の活動はどうか。地域の人達が一番主人公になっていますでしょうか。

○東田氏 智頭町のまちおこしの補助金を使って、まつりを仕掛けていくという話を出しましたが、いつまでもそれは続かないということで、特に雪まつりに関しては、3年目からは何とか自分達でやろうということで。本当に智頭町主体で、取り組みを再度開

始しています。ただ、当然ですが、経済的基盤がなければまつりはできないし、人も集められません。この辺りが非常に大きな問題だと思います。

○高井氏 自分達でできることは自分達でやろうよ、そういう時代になってきたということですね。例えば、今日の、街道という話。それはひとつのきっかけなんですね。街道とか宿場を活かした地域づくり。まずもう一度振り返ってみて、資源をどのように活かしていくのが一番いいのかということ、皆で考える。お金のない時に一番力が出るんですね。我々も色々な意味で工夫します。そここのところに、人と人のネットワークが生まれ、仲間のチームワークが出てきたり。やはり地域おこしはお金のないところから始めることが一番です。お金のあった地域おこしなんて、絶対うまくいっていない。地域の方々が、自分達のことは自分達でやるという熱い思いを持って、地域のためにどういう活用をしようかと。そういった会を、今、一生懸命岩手の中で色々な地域に入って、「一緒にやりませんか」と市町村の方々にお話を、その方々を通して地域の方を集めていただいて、そういう会議をして打ち合わせをして勉強会をしているのが実態です。

○宮原氏 高井さんのところは、そういうことについてくださる地域の人はどういう方達がいらっしゃるのでしょうか。

○高井氏 一番多いのはシニアの方。そして女性の方ですね。ボランティアとありますが、これから地域を活性化してもらうのは、僕は、シニアの方、そして女性の方かなと思います。

○宮原氏 岡田さん、農家の方が民宿を開かれて、山奥ですが今は随分人が来るようになったというお話を聞きました。これも地域の女性が頑張ったのですか。

○岡田氏 「石畳の宿」という町から12キロも離れた山の中の農家民宿に、誰が泊まりに来るんだと、地域の方は、絶対反対です。私の経験した事例で申し上げますと、この地域づくりとか町づくりのテーマというのは、およそ総論では賛成は得られないものが本物の町づくりのテーマだろうと、あえて申し上げます。皆で「いいことだ、やろうよ」と、賛成多数で決定されるものは、たぶん20年・30年、時代遅れの発想だろうと思います。先を見るという

場合は、なかなか皆さんの賛成は得られません。その得られない賛成をどう転換していくか、これが地域づくりだろうということなのです。石畳という地域でこの農家民宿をつくるために、では地域の皆さんをどうやって説得していくか。何とかしたいんだという気持ちを、どう地域の中で巻き起こすかと。そういう運動が、実は石畳の宿での農家の女性達の立ち上がりに関連してつながってくると。ですから農家のお母さん達だけを説得したということではなく、そのお母さん達の旦那さん、亭主族を先に口説いて、そして一緒にやりましょうよと。そのために、本当に長い時間がかかっているんです。

○宮原氏 これから一番地域の力になるであろう女性の方達が動ける環境を、まず外側から整えていくということ。それから古い歴史を残すという部分で、そこに住んでいらっしゃる方達のご苦勞というのは、やはり外側にいると大変さがわからなくて、簡単に物言いをしてしまったりすることが多いと思うんですね。東田さんのところも、かなり伝統的な町並みを残し、活かし、ご自身の会社も酒蔵というものを活用されているわけですが、その辺りの思いなどございますか。

○東田氏 先程お話した石谷家住宅。これは石谷さんという地元の山林地主なんですが、建物を町に寄付されたんです。町はそれを財団にして「因幡街道ふるさと振興財団」という財団をつくり、その財団が今、管理しています。もう1つでも2つでも、公開してくれる家がないだろうか。お願いにあがってはいますが、なかなか難しい。

私自身の蔵は、改造しました。鉄筋の建物の外壁に杉の板を張りまして、全部黒く塗りました。表面から見ると、何となく酒蔵の雰囲気が出ると。そういう風にして、少しでも町の景観に沿うように改造しました。一応町の観光スポットとして、中も全部変えて杉板張って、お客さん迎えるようなかたちにしてあります。これをやるには、まずやる気と思いがないとなかなか難しい。

○宮原氏 わかりました。鳥津さんのところの三宿はいかがでしょうか。

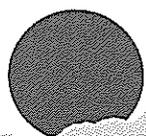
○鳥津氏 二井宿は数ある大火で、旧宿場はほとんど焼けて、湯原宿もまた火事にあいまして、建物などはないのですが、峠に小さ

な曲がりくねった道がある。実はこれが、旧宿場の街道なんです。厳然たる古道でありながら、地元の人達にはこれが古道であるという認識がない。この古道を歩かないと全く街道の価値が出てこないんです。そこで古道ウォーキングをやる。そういった事を通して、本当の価値観を生み出す。そこに建物がなくても、すばらしい歴史財産が体感できる。私達がやっていきたいと思っているのは、価値観の認識もそうなのですが、価値観の創造です。そんな事を、これからやっていきたいと思っています。

○宮原氏 ありがとうございます。今、紹介して下さった古道ハイクは、私も今年の5月に参加させていただきました。何がすばらしかったかといいますと、昔の人の知恵。標高差が200~300メートルある峠の道で、昔の人は、上手に誰でも通れるようなルートをきちんと捉えているんですね。しかもその途中には、風穴といって、山の斜面に冷気が出てくるところがその道沿いにありまして、それを冷蔵庫がわりにして、蚕が孵化するのをコントロールしていたとか。色々な知恵がその道沿いに詰まっていました。見えるものだけではなく、目に見えないものも本当に大切にしていこうということが、やはり歴史をつなげていく事の、ひとつの価値を見出してくるところなのかなということ、まさに鳥津さんのお蔭で気がつかせていただきました。

それから、新しい価値観の創造ということ、鳥津さんがおっしゃいました。未来に向かってどういう風にこういった街道や宿場を取り上げていったらいいか、ないしは自分達の地域をどういう風に持っていったらいいか、少し皆さんからお話をいただきたいと思います。岡田さん、いかがでしょうか。

○岡田氏 その遺産や環境をどう活かすかという切り口で考えていくと、それはお金に換えましょう、経済の活性化のために活かしましょうと、常に語られてきたと思うんですね。しかし、私はそれは違うと。うまい活かし方がどれなんだという発掘の仕方じゃなくて、「ああはなりたくないな」という反面教師を是非つくってください。そういう目を肥やすということが大切で、こういう町づくりフォーラム等々は、どんなにしたらうまく使えるかということ、何を学ぶよりも、ヘマを学ぶということをしつかりやっただけの方が、いい活かし方が見えてくるかなと。それは、一概にマニュアル化はできませんが、でも、失敗した事は、やはり認識した方がいいだろうと思います。



○宮原氏 東田さん、いかがでしょうか。これからの智頭で色々な活動を展開する時の考え方とか、未来に向けての展望を少し語っていただければと思います。

○東田氏 そうですね。私どもの会社は、145年目を迎えているんですけども、原点をよく考えなさいというのが、僕は必要じゃないかと思ってます。島津さんに非常にいいヒントをもらいました。古い街道を歩いてみて、目に見えないものを見つけて、そこから考えていくと。それがまずスタートではないかと思います。

先程の話に戻りますが、酒屋というのは、もともとは副業で酒を造っていたわけですよね。地域の人に必要とされ、支えられて、尚かつそれをお互い様という関係でやってきた。そういった「共生」ということを、強く意識して考えていくべきだなと、最近思います。

○宮原氏 ありがとうございます。島津さんの方はいかがでしょうか。

○島津氏 私どもは最初に申し上げた通り、三宿交流ひと言で表現していますけれども、これが軸です。交流を通して、色々な事を経験していく、色々なものを見つけていくわけです。

古道のウォーキングというのは、二井宿峠の古道を通して湯の原宿に入り、また湯の原宿の追分の碑から金山峠を越えて櫛下宿に至る。恐らくここの街道を歩いたら、すごい経験されると思いますね。そういった事を今までやってないんですね。

それから皆さんの絵図の右下に「三宿そば」と書いてあると思います。これは、これからやる事なんです。というのは、この地域は全戸、そば打ち道具を持っています。食文化を交流する場所を創りたいわけです。ですから「三宿そば」という名前で、この三宿にそば街道をつくる。そういった事を通して、この歴史的資源を活かしていければなと思っています。

○宮原氏 そろそろ時間も迫ってきたので、何かご質問とかご意見がありましたら。はい、お願いします。

○発言者 私、福島県の伊達郡桑折町という所から来ました。羽州街道・奥州街道の分岐点でございます。地元の中心で、地元の方々が立ち上がらないといけないというお話、本当にそうだと思います。桑折町も、今、TMOというひとつの立ち上げを考えておりますが、

なかなか先が見えません。色々な設備、建物を建てるということになると、これは我々地区民だけではできないような気がしますが、その点これからどうしたらいいかお聞きしたいなと思います。

○宮原氏 いかがでしょうか。住民主体といいながら、でもやはり町や行政と協力していかないとできない事だってあるでしょうということですが。

○岡田氏 最初から、行政に「お金をくれないければ何もできないじゃないか」と言っている間は、たぶんお金貰ったってできないと思います。行政に色々なものや施設を求める前に、自分達がどこまで立ち上がれるかが大事だと思います。

○発言者 静岡県袋井市からきました。これからの街道・宿場の地域づくりで、トイレの整備、これだけは絶対してほしいと思います。これから街道ブーム・街道歩きというのが、どんどん多くなってくると思います。すばらしい、歩きやすい道は、これからの地域づくりに必要になってくると思いますので、どうかよろしくお願い致します。

○宮原氏 地域の人達がまずは主体となって、自分達の地域をどう見ていくか。それから新しい価値の創造。単に古い歴史を、街道と宿場に求めることだけではなくて、そこから新しい価値を創造していきながら、次世代につなげていくと。それから「共生」という言葉。地域と、歴史と、時間と共生しながら、ゆっくり町づくりをしていくということも必要なかと思います。地域・地域で色々な方向性があるって、「これだ。こうじゃなきゃいけない」ということはないんだと思います。今日の分科会は、私は大変有意義だったのではないかと思います。本当にどうもありがとうございました。

第3分科会

テーマ：「食文化と街道」



案内人：高峰 博保氏



語り部：菅原 昭彦氏



語り部：片岡 吉則氏



語り部：渋川 恵男氏

○高峰氏 最初にご三方に、食との関わりあいも少し交えながら自己紹介していただきます。では菅原さんからお願いします。

○菅原氏 「スローフード気仙沼」の代表を務めております、菅原昭彦と申します。私がこの食の町づくりに関わるようになったのは2つの理由があります。気仙沼という所は、かなり交通の便の悪い所で、しかもどうも基幹産業である水産業の見通しが暗いぞと。高速交通体系から大きく外れているものですから、地域の活性化をどうするかという話から、少し何を題材にしたらいいかというのを考えてみようというのが1つ。

それからもう1つが、本業である造り酒屋の視点であります。造り酒屋は、幸いにも伝統産業といわれる日本酒を造っておりますが、そこにはいろんな造り手の苦勞とかドラマがあって、これをもう少し人に伝えることができたなら、もっと飲んでいただけるのではないかと。この2つの観点から、食の町づくりに手を染めていきました。

○片岡氏 皆様、岐阜県高山市から来ました片岡でございます。さて、本日私は、ぶり街道推進協議会の一員ということで、この席に座らせていただいております。ぶりは、特に飛騨地方とか西日本では、特にお正月を祝う魚として使われます。富山湾で獲れたぶりが、少し塩をされて、飛騨街道を富山から高山に運ばれたわけでございます。そして高山で更に塩をきつくして、高山でセリをされます。そのセリがされた時点で、飛騨高山には海はございませんけれども、「飛騨ぶり」という名前に変わります。そして、北アルプスを越えます。ですから信州・松本・飯田では、ぶりのことを「飛騨ぶり」と言います。ぶりを通じて、ひとつの街道が

江戸時代から明治・大正・昭和と受け継がれてきたわけですが、これを再認識しながら地域の活性化に役立てようとしています。

○渋川氏 皆様こんにちは。会津若松からやって参りました。会津若松は、海に面する部分が全然なく、海に対する憧れや畏敬の念を非常に強く持っていた土地柄なのですが、冷蔵庫のない時代は、乾物に頼るしかなかったわけです。北海道で獲れた乾物が、新潟港に運ばれて、越後街道を通過して運び込まれました。もう1つ、天の川という川で船に積み、川上にさかのぼってくるという、この2通りの方法で、会津若松に乾物が運び込まれました。その中でも有名なのが「身欠きにしん・棒だら・貝柱」。その3つが会津の三大乾物と言われまして、越後街道を別名「乾物の道」と言われていたことがあります。

○高峰氏 地域により食文化に相当違いがあるということが、今のお話でご理解いただけると思っています。さて、スローフードというと、地域に伝わる伝統的な素材なり食文化を活かした、地産地消のようなイメージが浮かんでくるのですが、「スローフードって何？」ということ、菅原さん、お願いいたします。

○菅原氏 「スローフード」という言葉の意味は何なのか、ということを少しお話させていただきます。私が「4つの誤解」と呼んでいるものがあります。

まず1つ目が「スローフード」という食べ物がある、またはそういうメニューがあるという誤解ですね。そういう食べ物はไม่มีです。「スローフード」というのは考え方です。2つ目が、ゆっくり食べることだと思っている場合がありますが、そうではありません。

それからファーストフードの反対語だろうという話もあります。これもちょっとした誤解なのです。スローフードには、自分達の普通の食文化・食べ物をもっと考えてみよう、普段の食べ物をもっと大事にしてみようという意味あいがあります。ファーストフードを真っ向から全部否定してしまうような話ではありません。4つ目が、珍味とか珍しい食べ物、グルメのことを言っているのではないかという誤解。では本質というのは何なのかというと、一言で言うと、「食べ物がつないでいる関係をもう一度見直してみよう」です。食材を通して人と自然は必ずつながっています。

それから、人と機械とか、人と分明・文化とか。いずれ食べ物も全つないでいる関係だとすれば、今それがどうなっているのか、もっと考えてみましょう。こういったことを、この「スローフード」というのは言っているのです。それから、提供者の責任・生産者の責任をきちんと果していきましょう、片方で、食べる人達はきちんと選ぶ目を持ちましょう、そしてもっと皆で、地域の資源である食材を掘り起こしながら、あるいはその食材の価値に気づきながら、地域の食文化というものを大事にいきましょうというのが、このスローフードという運動の本質なのではないかなと思っています。

○高峰氏 今回の「街道」というテーマにも関わってくると思いますが、気仙沼という地域の中だけで、今のお話というのは完結するものなのでしょうか。そうではなくて、外部からのいろんな素材や文化、人というの積極的を受け入れていくというおつもりがあるかどうか。その辺りはいかがですか。

○菅原氏 最終的に、こういうことをやっていくと、自分達がやっていて楽しい、あるいは食べていて楽しければ、外からの人をその気持ちでもてなそうということになっていくわけですか。

もう1つお話させていただくと、スローフードのポイントの中に「食材に旅をさせない。人に旅をさせよ」というのがあるんです。例えば新鮮な魚や野菜のことですが、食材が旅をすると、遠くに行けば行くほど鮮度が落ちるし、それを防ぐために防腐剤を使ったり、化学薬品を使ったりしなければならぬ。だったら人が動いて、自分達の所に来て味わってもらったらどうかと。食材にむやみやたらに旅をさせるのではなくて、実際にその土地に行って食べてみる、そんなことが大事なのかなと。決して交流を否定しているわけではなく、むしろその交流をどんどんやっていければ

いいのではないかなと思うのです。

○高峰氏 私が最初に関わっていた「フードピア金沢」は、今のスローフードの話と、多分目指していることは一緒だったと思います。私達が目指したのは、集客装置としてのイベントではなくて、批評装置としてのイベントとして、徹底して取り組んでいこうというものでした。地域の食文化を再評価し、どこに価値があるのかを伝えるために、外部の人をあえて最初から受け入れる。その人を受け入れる中から、地域の持っている価値を見直していくというアプローチもあって良いのではないかなと思っています。

それで、今のお話の中で、「食材に旅をさせない」とありましたが、そういう意味では「ぶり街道」というのはぶりが長旅をしているお話なのですね。そこと今の話がどうつながるかということ片岡さんからしていただけるとありがたいのですが。

○片岡氏 まさしくスローフードの概念というのは、昔の人達がぶりという食材をいかに加工をしながら内陸まで運んだかという文化であり、知恵であった。それがまた街道の人達の歴史を築いたということだと思います。我々今「ぶり街道推進協議会」が何故このような運動をしているのか、それは、地域の人達が忘れてきている歴史を再認識するためです。観光資源にしたり、高山では、冬は、ぶり鍋にしたり新しいメニューに起こしたりしています。そういうことをやっていくことが、次代へつなげたり、他の地域の方々に来ていただくひとつの要素です。

○高峰氏 渋川さんは「渋川間屋」という名前のレストランをやっているのですね。そこで展開されている具体的な内容を少し紹介いただけますか。

○渋川氏 「食材に長旅をさせるな」という話が面白いですね。昔、交通の不便な時は、他の地域から影響を受けずに守られていた時代があったわけです。しかし今は、高速道路の時代ですから、どんどん流出して行って、守り切れなくなったという部分は本当に否めない事実だと思うのです。

今まで地域で守られていた文化・食・伝統というものが、人口減少によって、それを支えるだけの経済的なバックボーンを失ってしまったと捉えるべきだと私は考えるのです。ですから、これからそういったものを維持するためには、高速道路を利用する。

ただし、異なった文化圏同士を結ぶ、「街道」という意味あいの道路として捉えるべきではないかと考えます。街道を利用した地域連携によって交流人口を拡大し、その経済効果に期待するということを考えていかなければならない時期だと思うのです。

また、渋川問屋の話をさせていただきますと、当然私どもは、昔から、乾物問屋として、身欠きにしん・棒たらと乾物を取り扱っています。車がない時代、遠くから来てその日の内に帰れないお客さんのために宿泊施設も提供し、夕食と朝食等は、身欠きにしんや棒たら・貝柱のお料理を提供したのです。今から7、8年前は、本当に寂しい、人が通らない通りになってしまいましたが、そのような食と地域のアイデンティティを出すことによって、結果として家のお店には年間8万人くらい来ていただくようになりました。

○高峰氏 店の歴史を活かしながら、新しい業態に見事に転換されている渋川さんの取り組みは、非常に面白いアプローチですね。

先程の「食材に旅をさせるかささせないか」というのを、もう少しだけこだわってお話をします。菅原さんの所で揚がった海産物、現実的にはかなり水揚げ量が多い。サンマの水揚げ日本一で、全国に流通している。それは高速交通体系がもたらした産物です。ですからそれは、地域にとってはプラスの価値を持っているということで、評価をしないとイケないのではと思います。一方の、人にいかに旅をさせるかという取り組み。それがどんどん膨らんでいけば、99%がその地域外に流していたものが、逆に95%になりました、いや1割くらいは地元での消費になるようにアプローチしてイケるのではないかとことです。そういう取り組みを少しご紹介いただけますか。

○菅原氏 「食材に旅をさせない。人が旅をする」。本当に極論な話ですが、一番おいしいものはどこにあるかといったら産地にあるわけで、そこをもっと上手く使って、人に旅をさせて来てもらうということを一番考えなければならないのではないかなと思っ少し話しをさせていただきました。

それと今のお話ですが、観光という観点で捉えた時に、「我々のところに何があるのだろうか」と考えたのが、この食材とか食べ物のことだったのです。上手く見せていければ、外からのお客様をきちんと呼び込んでイケるのではないかなと、今考えてやっているとあります。今一番売れているものというのは、物語性があ

って、個性的なものだと思うのです。それがきちんとお客様に伝わっているものが、どんな製品であれ売れているという事実があります。ですからそれを町ごと、気仙沼の物語、地域の食材から始まるストーリーをつくってあげて、尚かつ、ここでしか食べられないものをつくってあげて。そして、その見せ方・発信の仕方をきちんとしていくことをやっていけば、この地域に人が来てお金が循環する仕組みができるのではないかなと。街道や交流とは全然無縁な話ではなくて、むしろそのものごとを、たまたま地域を区切ってやっているだけの話で、これはもう少し連携・ネットワークしていけば、近隣には気仙沼にない文化遺産・文化的な価値を持った所とか、歴史的な建造物を持った所が他の地域にありますから、もっとダイナミックな誘客ができるのではないかと考えています。

○高峰氏 広域でネットワークを組んでいくという意味で、高山市がされている連携の話もご紹介いただけますでしょうか。

○片岡氏 江戸時代から続くぶり街道がもたらした都市間交流としては、隣の信州、松本市さんと高山市は、昭和46年に姉妹都市提携をさせていただきました。富山市さんとは災害応援協定をさせていただいております。

そして、先程のスローフード、ファーストフードの話に戻りますが、食に関する皆さんの関心というのは非常に高く、観光における食は、非常にウエイトが大きいのと思っております。ぶり街道推進協議会は、地域の食のポイントを巡る広域観光ルートを売りにしております。それが、歴史的な街道を現在に活し、発展的に活用させていただいている1つの例かと思っております。

それからもう1つですが、今後日本の観光客は完全に減ってくると思っています。ですから、女性や老人にターゲットをしぼり、住んでいる者が、心もハードも障害のないバリアフリーの町をつくらうよと。それがひいては観光客に喜ばれるのではないかとということで向かっております。

○高峰氏 ありがとうございます。皆様方からご質問なり、ご意見があれば少々頂戴できればと思います。いかがでしょうか。

○発言者 (マイクなしでの質問で、聞き取れず) その辺について。

○高峰氏 具体的な例を言いますと、牡蠣まつりというのをもう20年近くやってきてます。1つの素材にテーマを絞って柱をつくってしまうというアプローチが、1つのやり方ではないかと思えます。意識的につくられたものが、1つの観光の対象になるということもあるのだと思うのです。高山などもそうですね？

○片岡氏 今、全国で市町村合併が進んでおります。合併の効果として、私は今の食材に関して思えますのは、それぞれがみんな競って同じことをやっていたのではいけないのだと思えます。この地域であればそばがおいしいよとか、この地域は牛だよとか、ポイントを絞って売っていくということをしなければ今までと同じではないかと思っております。

○菅原氏 私は、食の世界というのは何でもあっていいと思えます。どれか1つに絞って売り出すのではなくて、総合的に売り出すしかないだろうなという考え方ですね。地域で素材を区切ってやるというやり方、それから何かに特化させてやるやり方、何でもありだけど、上手くコーディネートしながら、あるいは見せ方で工夫していくというやり方と、いろいろあるかなと思えました。

○渋川氏 今は、コンピューターの時代で、居ながらにして物も情報も手に入る。しかし人は旅行をします。それは、自分達が毎日生活している周りがある世界とは違う世界・違う文化をのぞいてみたい、という思いからではないでしょうか。ですから、広域的な交流、連携とか、こういったものを唱える前提としてね、よそからきた人が異文化を感じ取れるような地域おこしが大事だろうと思うのです。それによって、他の地域から「あそこ面白いことやっていたから、一緒にやってみよう」というお誘い、連携が始まる。街道といわれる高速道路や、社会の整備は、そういったものを引き起こさせるための1つの起爆剤、ツールであるという取り方ではないかと思っております。

○高峰氏 最後に一言ずついただきたいのですが。

○菅原氏 先程「食がつなげる環境を見直そう」という話がありましたが、食べ物を楽しみながら、皆でわいわいと楽しくやっていくものだとか割り切って、おいしく食べることをやっていただければと思います。そしていろんな所と交流をしていただいたり、

訪ねて行っていただいたりする中で、いろんな他の文化の価値観などを知りながら、自分のところの価値をもう1回見直してみようとか、歴史とかを見直してみようということができてくれれば良いのではないかなと思います。

○片岡氏 ぶりの話を、我々は先程からさせていただいておりますが、今からおいしくなります。ぶり街道という切り口でまた松本・高山・富山を訪ねていただきたいと思えます。

○渋川氏 今、会津は、規模の競争をしたのでは、結果として東京にかなないっこない。我々はそういうステージで競争しても負ける。無駄な努力をしないで、別のステージで流出していった消費人口を超える数の人達を呼び込むことを考えていきたいと思っております。

○高峰氏 今日は「街道」と「食」ということをつないでお話をさせていただいたのですが、まず歴史的なものを評価しようというのが、街道というものに対する後押しの中の1つです。それと街道を通じて新しいネットワークを広げていこうということが、次のポイントです。そしてもう1つ、何か新しい街道をつくっていくというアプローチもあって良いのかなという話を、本当はしたかったんです。

街道というどうしても陸路のイメージが強いのですが、「海の道」というものをもう一度再評価するというアプローチも是非していただきたい。もちろん「川の道」もあります。また今は空から人が来るのです。人がある一点に辿り着いて、それからどう動くかという人の動きというものも、是非お考えいただきたいなと思っております。今日は本当にありがとうございました。

第4分科会

テーマ：「出羽(いでわ)、みちのく街道と旅人」



案内人：村山 友宏氏



語り部：伊達 宗弘氏



語り部：田口 昌樹氏



語り部：西田 徹氏



アドバイザー：金坂 清則氏

○村山氏 案内人を務めさせていただきます、村山友宏でございます。職業は、街づくりのことをやっております、ボランティアでウォーキング協会の「歩け歩け運動」というのを30数年来やっています。

今日の話の流れですが、まず旅人というキーワードを中心にして、その旅人たちからどんなことを学ぶのかということについて、お話、あるいはヒントをいただきたいと思っております。また、それを地域づくりにどう生かしていくのか、将来に向けてのお話、ご提案をいただければと思っております。まず伊達さんの方からお話をいただきたいと思っております。

○伊達氏 伊達でございます。宮城県の図書館の館長をしております。古来、多くの人々がなぜ、みちのく、東北に憧れ、この国に誘い込まれていったのかということについて、お話してみたいと思っております。

この東北、青森、岩手、宮城、福島は、「陸奥国(むつのくに)」と申しました。この陸奥国は大変面積が広がったため、しばしば東北全体の総称のような用いられ方がなされ、その昔は道の奥の国、「みちのく」と申しました。みちのくというのは、政治の外、支配の外という意味であります。しかしその後、政治が行われ、文化が開かれてきても、当時の言葉の使われ方が今日までなされてきておりますが、会場にお集まりの皆様方は、このみちのくという言葉聞いた時、どんなイメージをお持ちでしょうか。旅にでも出てみたいような、何か忘れていた大切なことを呼び覚まされるような、そんな言葉に感じる方が多いのではないかと思います。これは、今からお話を申し上げるような、一つの経緯を経ながら、歌枕の国みちのくが成立をし、併せ、みちのくという言葉

葉が変質を遂げられたと考えられております。

多賀城に国府が設置されたのは724年頃のことではありますが、軍事を司る鎮守府に、役人として来た人達は、異郷の地ゆえに様々な思いを込めて歌を歌ったといわれております。また、京や奈良の都の人達は、異郷から伝えられるまだ見ぬ異郷の美しさに、様々な思いを込めた歌を残してまいりました。

こうした中で、860年代、後に左大臣となる源融(とある)が、自分が支配することとなった東北の美しさ、とりわけ松島の美しさを噂で聞いていたので、京都に、風雅の限りを尽くした庭を造ったといわれております。都の人達はこの庭を見て、まだ見ぬみちのく、東北への思いを込めた歌を歌っていったのであります。

こうして宮廷みちのく歌を通して、空想化され、ロマンの国のような観念の世界、歌枕の国みちのくが成立をしてみまいりました。そして、東北への旅は風流を意味するまでに高められております。

そして、1030年頃、能因法師がみちのくに2度やって来て、また全国各地を脚し、晩年歌学書、歌の手引書を作っております。この東北が、1000年以上前、文学的には既に都の風土の中に組み込まれていたのであります。

そして、今から320年前、やはり松尾芭蕉が『能因歌枕』を訪ねてこちらにやって来たわけであります。「笠嶋はいづこ五月のぬかり道」と奥の細道にとどめておりますが、こういう経緯を経ながら、歌枕の国東北が成立をし、併せ、みちのくという言葉が変質を遂げられていったと考えられております。

○田口氏 田口昌樹です。「菅江真澄研究会」というものがありまして、副会長を務めています。まず、菅江真澄という人物がどういうことをしたかについて、時間をお借りしたいと思います。

約200年前、東北6県と、北海道を歩いたのが菅江真澄です。生まれは現在の愛知県、三河の国と言われていますけれども、正確な誕生の地はわかりません。31歳の時に、山形県の海岸を北上しております。そして秋田に入りまして、その後岩手、宮城、福島を歩きました。そして、天明8年に、北海道に渡りまして、アイヌの人達の生活を細やかに描写しているわけです。1801年になりますと、また秋田に入りまして、亡くなる1829年までずっと秋田にいました。

先程イザベラ・バードの記述には感情の起伏が大いに影響しているとの発言がありましたけど、菅江真澄の場合はほとんど感情の高まりというものはありません。自分の意見を言うことなく、聞いたこと、見たことをそのままに記しています。上は殿様から下は我々の先祖であります農民、百姓のこと、さらに注目すべきは、平民にさえなれなかった人達、例えば非人とか穢多(えた)、それから門付けをして歩く旅芸人、遊女。こういう人たちのことも、一切批評を交えることなく記録しています。

この人の書いたものは、我々一般の人達が見ることができたのは、昭和40年頃になってから。真澄の旅の記録は芭蕉の数千倍もあるのだけれども、皆さんの所に未だ届いていないのです。ですから、真澄という人がもっと一般的になるのはこれからだと思うのですが、そういったことを語り続けていきたいと思っています。

○西田氏 どうも、こんにちは。金山町から参りました西田徹と申します。私は今、教育委員会の方に勤めています。

それでは金山町を、イザベラ・バードが通った町という視点で紹介させていただきたいと思います。先程、赤坂先生が、バードについていろいろな紹介をなさったのですけれども、うちの町はお褒めいただいている場所です。『日本奥地紀行』の中で、金山につきましては、明治11年の7月ごろ訪ねていただきまして。最初に見た印象を、「険しい尾根を越えて、非常に風変わりな盆地に入った。…(中略)…その麓に金山の町がある。ロマンチックな雰囲気のある場所であり、私は正午には着いたのであるが、ここに1日か2日滞在しようと思う。」と好印象で綴っております。また、地元の人との関わりにおいても、接した駅通係や医師、戸町が、丁寧な対応をしたと語っております。新庄から国道13号線を北上して山を越えて、盆地に入るとこういう風景が見える、そんな町です。

○村山氏 ありがとうございます。では次は、そこに訪れた色々な旅人達、そこから今どんなことを学ぶべきかということ伺いたしたいと思います。ポイントを簡単にお話いただきました後で、金坂先生からアドバイスをいただきたいと思っています。伊達さん、お願いします。

○伊達氏 先程申し上げましたように、平安時代以降、東北は憧れの対象でありました。能因や西行は、当時の都の歌人達がただ知識としてしか持っていない『万葉集』以来の東北の歌枕を実際に探訪し、この目で確認するという行為を行ったわけであります。そして後世の宗祇や、あるいは松尾芭蕉は、そういう能因や西行の後を慕う旅で、さらに多くの人たちが、この先人の後をたどりながら様々な記録を残し、歌を歌ったりして、みちのくの文学風土を形成していったのではないのでしょうか。

明治になって以降も、正岡子規とか、与謝野鉄幹、晶子、あるいは河東碧梧桐、色々な人が来ております。220年前には、幕府の巡見使に随行して、『東遊雑記』を残した古川古松軒。合理主義的な透徹した目と旺盛な探求心で、詳細、正確な記録をとどめております。

また、ドイツの建築家ブルーノ・タウト。この人は桂離宮や、伊勢神宮、白川郷の合掌造りの民家の素晴らしさを、日本人に紹介した人としてよく知られております。これらの旅人の記録からは、豊かな自然や人情、生活は貧しくても、そこに住む人々のいきいきとした様子をたどる事ができます。旅人がどんな目で東北を見、あるいは何に感動したのかということを見つめ直すこと、そしてまた、自分もその旅人の歩んだ道をたどってみるということも、地域づくり、まちづくりの第一歩になるのではないかと考えております。

○田口氏 また菅江真澄という人のことを若干お話したいと思いますが、真澄の記録というのは日記、地誌、それから随筆、図絵集というかたちでなっています。その当時の一般の人たちの民俗を記録しました。どんな時に喜び、悲しみ、そしてその当時の神社やお寺にどんなかたちで参拝していたのか。そしてお酒を飲む時はどんな時で、そんな時にはどんな唄をうたっていたのかといったような民俗。柳田國男という人は、「日本の民俗学の父」といわれているのですけれども、その柳田が菅江真澄をとらえて「民俗学の祖」と言って紹介しております。

菅江真澄は、歴史、地理、膨大な書物、それから、『源氏物語』とか『徒然草』『方丈記』そういったものをたくさん引用しています。歌集を持って歩くわけではないのです、全部頭の中に入っていたのでしょう。この記憶力の抜群さには本当に驚くばかりです。秋田では進んでいます、真澄という人のことを、もっと広く知っていただきたいと思います。

○西田氏 私は、イザベラ・バードからどんなことを学んだかということでお話したいと思います。金山は先程もお話ししましたように、羽州街道に開けた宿場町であります。白壁作りに土蔵や住まいが周囲の山々と調和し、緑映える落ち着いた町並みを作っております。明治の時代にイザベラ・バードが訪れて120年程過ぎておりますが、今もその風景は変わらないという風に思っております。私たちは、イザベラ・バードがロマンチックな雰囲気のある場所と称えた町並みや自然を、誇りに感じながら保って、作り上げていき、次代に引き継いでいかなければならないと考えております。異国の旅人が感じた往事の印象を通じて、次代への「まちづくり」の糸口を学んだのではないかという風に感じております。

○金坂氏 参加者の立場からのアドバイスになるかと思いますが、伊達さんと田口さんは、具体的な街道のルートということではなくて、旅人に即したお話をされた。しかし街道そのもの、もっと街道と旅人というつながりをお聞きしたかったと思います。

西田さんの方は、バードが捉えた、金山という所の良さを、地域づくりに今後活かしていくということでした。お話の中で最後に、風景は変わらないという風におっしゃっていますが、一方では、町並みも確実に変わっていているわけであり、歴史的なものをどのように将来に活かしていくのか、変わっていきるところと変わっていないところ、ということも考えてみるべきじゃないかなと思います。

全体の鼎談の方も、僕はバードのことに関心がある。確かにバードという人は、大変優れた旅人であったと思います。けれども、あまりにもバードを礼賛するという姿勢には疑問を感じるわけでありまして、もっと一つ一つの事実を解きほぐしていくということが大変大切なことであると。褒められすぎるとそこから進んでいけないのではないかなと、私には思えるんですね。先人から何を学ぶのかということを探求していきたい。是非その点も含めて、村山さんが紹介された人物のうち、3人の語り部の方々が触れら

れなかった人物について村山さんからちょっと補足をさせていただきたいのですが。

○村山氏 ありがとうございます。まだ触れられていない、非常に価値ある旅人たちがおり、用意した17人ほどの紹介スライドは今日は時間的にも無理なので、これについては、別の時にふれるということで省略させていただきます。ただ1点、コーディネーターの立場から一言ご提案をさせていただきたいのですが、実は、私は何を学ぶかと言いましたけれども、その方法論というのがあるだろうと。それは、簡単に言ってしまうと、先人が歩いた、旅人の足跡マップをつくり、それを丹念に辿っていくことだと。非常に地道なことなんです、それが様々な出会いや知見を生み出すわけです。

私の場合は、ウォーキング協会で、「良寛ウォーク」、「道元ウォーク」などのほかに「伊能ウォーク」というのを2年間かけて、この全国を伊能忠敬が歩いたコースをたどりました。また、12年間かけて、松尾芭蕉の道を歩いております。そこでやるのは先人が通ったコースをただ歩くというのではなくて、自分なりのテーマをもって新しい学習体験をめざして歩く。そして先人達がやったことの情熱だとか、そのまなざしとか、そういったことを改めて発見していく。そういうことによって、現代に何を活かしたらいいかというヒントが出てくるんじゃないかと思っています。

最後にご意見があれば伺いたいのですが、パネラーの皆さん方から、今度は地域づくりということで、こういうふうにかしたと今考えている、あるいは具体的な活動をしている。そんなことがありましたら、お話を伺いたいのですが。

○田口氏 私は真澄のことばかりお話しして、街道のことにほとんど触れなくて申し訳ありませんでした。羽州街道というテーマなんですけれども、実は吉田松陰にしろ、菅江真澄にしろ、芭蕉にしろ、日本海岸を通るのが便利だったのではないかなと。北国街道と呼ぶんだそうなんですけれども、そういった面も考えないとならないのではないかなと思います。

真澄の、街道沿いの村々を訪ねていた時の記録も残っています。しかし何しろ40年間色々旅していますので、街道の記録というよりも、それから別れた枝道の方の記録が多いです。

それから、この菅江真澄を活かすということで、今、男鹿の人達が、道の駅と、男鹿半島と一緒に活用しようという取り組みを

しています。男鹿半島というのは、景色が良くて、魚がおいしくて、自然が豊かです。でもそれで、何かやはり物足りない。そこで、私たちは菅江真澄を登場させているのです。この人の話を紹介することによって、男鹿半島がさらに広がっていくのではないかと、私達は考えています。

○金坂氏 私からのアドバイス。私達は先人の旅行記を色々な活用しているわけですが、解釈するよりもまずそれを楽しんで、そして興味を持っていくのが大切ではないでしょうか。菅江真澄でも、バードでもそうですが、かなりリアリティのある道を歩んでいるんですね。その道を実際に歩く。そして、旅行記を現地を持って行って楽しみましょう。自分が主体的に、過去の旅をした旅の時空と、自分の旅の時空ということ、単なる追体験ではないところで楽しみましょう。これが私のいうツイン・タイム・トラベルです。

学者というのはどうしても、自分の研究に引きずり込むところがあるわけです。それは、僕は良くないのではないかと考えます。決して、旅行記というものを一つの分野から扱ってはいけません。むしろ、まず感性でもって感じ、そして実際にその場に行って、色々な分野に関心を持って、それを色々な人と相談したり、話し合ったりしながら、出会いを作っていく、そして大きな運動体にしていくべきじゃないかなということを思うんですね。どうも、この街道という問題、あるいは旅行家という問題は、学問を超えたものであろうという風に思うのです。

○村山氏 ありがとうございます。ほかにございますか。それでは西田さん。

○西田氏 地域づくりにどう活かすのかということですが。金山は、金山杉という、良質の杉が採れます。地元の杉を組み合わせ、「町並みづくり100年運動」というのを進めています。単なる観光地をつくるんじゃなくて、町の人が住んで良かったとか、訪れた人が住みたくなるような町を目指しています。例えば住民の方に、住宅を造る時にできるだけ木造の住宅を建てていただきたいというお願いをしまして、それに併せて、道とか、公園、それから水路なども建物に合うようなかたちで、バードが見た印象というものを大事にしながら、「まちづくり」を行っております。

○村山氏 ありがとうございます。もう、時間がわずかしかございませんが、どうしても何か一つご意見でもあれば、どうぞ。

○伊達氏 私達の住んでいるこの東北は、色々な所に美しい山や、川や、あるいは風情ある祭りや町並みが残っています。そういうものに、しっかりと自信と誇りを持って、まちづくり、地域づくりを興していくということが、一番大切なことではないかなと、そう私は考えております。素材はいくらでもあると思います。例えば、文学、文化の回廊とか、峠、名利、鎮守の森回廊、歴史と浪漫回廊と、どこにでもある素材を上手く重ね合わせながら、地域を光り輝くものにしていく、そういうことができるのではないかなと思います。

○村山氏 ありがとうございます。では何か最後にキーワードか何かございましたら。

○金坂氏 もう一つ抜けていることがあると思います。本日第4分科会で取り上げられた旅人は皆東北の人ではありません。そのような人々がやってきたわけですから、そのような人々との繋がりを介して、地域交流・異文化交流を図っていくことができるのではないかとことです。過去の旅人やその旅を未来に向かって活用するという事です。バードについては、山形県で関心が強く、南陽市のハイジア・パークにイザベラ・バードコーナーが設けられたり、バードの石碑が各地に設けられたりしているのですから、このような事跡を礎として、バードゆかりの地と山形県あるいは東北諸県の機関や人々が交流することは突飛なことではないと考えます。それこそ歴史街道を活かすことにもなるわけですから。

○村山氏 ありがとうございます。今日はいろいろ興味あるお話を伺い、大変教えられるところがありました。またみちのくの旅人から学びたいことがまだまだたくさんあるようです。これからも一緒に考えていけたらと思います。本日はどうもありがとうございました。

第5分科会

テーマ：「湯のまちづくり ～かみのやま温泉からの提案」



案内人：三田 育雄氏



宇田 倭玖子氏



語り部：橋 眞紀子氏



語り部：須谷 正代氏



語り部：工藤 真理氏

○三田氏 こんにちは。今日は、街道と温泉ということがテーマになります。江戸時代、街道を中心に、旅が盛んになったということが言われています。最近では、旅と言えば温泉がつきものです。しかし一方で各温泉地の低迷も目につくようになりました。今日は、この「街道」「温泉」という問題について、温泉場で生業を営む女性の立場から、議論をしていただこうと思っています。須谷さんからお願いします。

○須谷氏 こんにちは。山中温泉というのは、石川県の最南端、福井県との県境に位置する温泉町でございます。主な産業としまして、日本一の生産を誇ります、漆器の産地でございます。松尾芭蕉さん、温泉を発見された行基さん、それからおよそ800年前に山中温泉を再興された長谷部信連公、それから浄土真宗の復興の僧、蓮如上人。山中ではこの四方を四聖人と呼びかたがたに培われ、また歴史に磨き上げられ、旅人に育てられた温泉地というのが、山中の特徴かと思っております。

○宇田氏 伊豆半島のちょうど真ん中にあります、湯ヶ島からまいりました。熱海・伊東・修善寺の温泉場には、華やかな文学者・文人達・偉い方達・文人のお客の方達が来られたのですが、湯ヶ島はもう少し奥地にありまして、その昔は川端康成といった人達がゲストスピーカーになっているところでございます。

○橋氏 橋でございます。宮城県と山形県の県境、秋保温泉からきました。秋保温泉は、家族連れにも大変人気のある温泉です。しかしまだまだまちづくりには手つかずの状態、我々のような若手の経営者達が集まって、いろいろと知恵を出し合って、それに

取り組んでおります。今日はそのへんのことをお話させていただきたいと思います。

○工藤氏 工藤でございます。かみのやま温泉は山形市より車で20分ほどの所でございます。ご覧のように、蔵王連峰のふもとの町で、大変産業的には温泉の他に農業や工業も盛んでございます。開湯は約600年前に遡りまして、かつては奥羽三楽郷と言われまして、非常に賑わった温泉でございます。

○三田氏 みなさん、ありがとうございます。では次に温泉地の現況の取り組みということでお伺いしたいと思います。今は観光や旅で、泊まるのなら温泉地だという気運が強いのですが、しかしながら、全国的に見ると、温泉地の中で元気な所は意外と少ない。今日は、各地から来ていただいた皆様から、どんなことをやって、どんな課題に立ち向かっておられるのかご披露いただきたいと思っております。

○宇田氏 湯ヶ島では、ホテルの事業を十数年前から始めまして、かなり注目を浴びています。何万人かをこの土地に1ヶ月間の間に来る手段を作るわけですから、その時に単発的にホテルをよそからお金で買ってきて飛ばすということではなくて、1年間育てるわけです。小学校に水槽を設けて生態系の教育をする。旅館の旦那さん達が生態系を学んで、学校の先生達に教えたり、ホテルのおまつりの時には、環境教育というホテルづくりのことや自然体系のことをお話ししたりします。そういうまちづくりを地道にしています。

また、天城を歩く時速4kmの旅を提案しております。やはりイ

ザベラ・バードさんのお話にあるように、これからは自動車のモータリゼーションのハイスピードのものではなく、もう少し長い目で見た自然環境の試みを提灯下げながらみんなで考えようじゃないかという、そういう試みはもう始まっておりますが、まだ地味なところですよ。

○三田氏 それでは橘さん、お願いします。

○橘氏 私どもが一番大事にしなければいけないと考えておりますのは、地元の子供達が自分達の住んでいる地域の温泉にいかにしたら自信が持てるかということです。仙台に小野寺純一先生という大変すてきな絵本作家の先生がおりまして、「ほくらのマッチ箱電車」という作品をつくっています。今はなくなったのですが、昔秋保電鉄という電車が走ってまして、その時の懐かしい風景などを絵本にしました。その先生にお願いして、秋保の民話を絵本にしたり、絵はがきなどもたくさん作りまして、そういうものを子供達にあげることによって、地元のことをもっと知ってもらおうという取り組みをしています。また、食育教育ということで、宮城県は海の幸・山の幸に大変恵まれておりますので、それを給食などに取り入れてもらいまして、地元の食材をもっと知ってもらおうということでやっております。また愛子駅から秋保温泉までの道路が、秋保・錦ヶ丘線といいます。自然環境に大変優れた環境保護地区になっておりまして、ウォーキングやトレッキングのメッカになっており、環境整備を始めています。

それから、地元から出ました秋保石をふんだんに使った建物で、とてもおしゃれな秋保・里センターという公共施設がありまして、アーティストの方達が自分達の発表の場ということで、展覧会や音楽会を催して、大変親しまれております。そういう形で、官民一体となって、いろいろなことに取り組みながらやっている状況です。

○三田氏 アーティストの活動というものと秋保温泉の利用促進というものは、どんな形で結びついているのですか？

○橘氏 いろいろな先生方が移住していらっしゃいまして、木工、彫刻、絵画等の作品をホテルの中に展示したり、先ほどの里センターで展示したり、お客様に使う器の中に使ったり、そのような形で取り組んでおります。

○三田氏 ありがとうございます。それでは工藤さん、お願いします。

○工藤氏 各温泉場さんでいろいろな問題を抱えていらっしゃると思いますが、上山でも決して例外ではなくて、一番の課題は、入込者数の減少という点があげられると思います。これではいけないという動きがありまして、3年前に、かみのやま温泉と葉山温泉の2つの組合が共同で、ゆかたまつりを実施いたしました。ゆかたまつりの企画でいらして下さったお客様にかみのやま温泉のオリジナルの女性用のゆかたをプレゼントして、そのゆかたを着て町を歩いてもらうという企画でございます。ものをもらって喜ぶ時代ではありませんので、それが一番の目的ではありません。昔は下駄を鳴らして浴衣姿でカラコロンと歩かれて賑わった町だそうですね。私達と組合の意識が一緒になりまして、また、そういった町を復活しようではないかという思いで企画しました。これまで2つの旅館組合が1つにまとまって1つの事業を同じベクトルでやるということがまったくなかったと記憶しております。小さい旅館さんも大きい旅館さんも1つになれたことは、すばらしいことだったと思います。

しかしだんだん先細りしていくのが怖い。もらったゆかたをバックにしまうのではなくて、これを着て歩きたいな、あの場所に行ってみたいなと思わせる町をつくるのが最終目的であることを、常に忘れてはいけないと思います。

○三田氏 それでは須谷さん、お願いします。

○須谷氏 山中温泉は、基幹産業に旅館と日本一の生産を誇る漆器業界がありますが、観光も漆器も近年どちらも沈んでいます。団体離れから旅館のハードの対応が1つの課題になってきています。また町の人と交わろうという取り組みを思索しまして、山林を花の咲く花木で潤したら、町人はもとより観光客のみなさんにも十分喜んでいただけるような観光地づくりができるのではないかと、女将さんがツルハシや鍬や鎌を持って、桜を植え出したのが12年前です。一番大きな目的は、自分達の子供や孫の時代に、何か強い商品を持った観光地であり、それぞれ町の人達が豊かな暮らしができるベースを考える、ということです。町人が心をとつにして旅人をおもてなしするという空気ができてきたのが、山中のここ10年くらいの大きな成果だと思います。

○三田氏 今度は少し突っ込んだ話をしたいと思います。みなさん、地域でいろいろな取り組みをされているというお話がありました。今日の会議の主題は街道ということで、先ほどイザベラ・バードの話が出てきましたが、イザベラ・バードは「日本奥地紀行」で、確か米沢平野のことを、鋤で耕したというよりは鉛筆で描いたような田園が広がっていて、それは非常に美しく、東洋のアルカディアだというくだりがあります。有名な一節です。そこには、バードの感動があったと思うのです。

最近の旅の中で一番欠落しているのは何かと言うと、いろんなサービスも必要ですが、やっぱり感動だと思います。旅は非常に便利になっているが、どうも感動がない。そういうことが、これからの課題ではないかと思っています。

あるいはもうひとつ、温泉地というのは、まさに街道の立ち寄り地点でありましたが、それが今はどんどん通過し始めたという意味で、街道のマグネットとしての機能の再構築が求められているのではないかと思います。これからの課題を含めてどんなことが必要なのか。

最近、ご存知のように、温泉疑惑という問題が起きて、一気に温泉に対する評価が落ちました。厳しい環境の中で、本当に温泉地はこれからどうしていくのかということをお伺いしたいと思います。それでは橘さんからお願いします。

○橘氏 私どもは東北に住んでいますので、宮城県がどこで、山形県がどこというのはわかるのですが、県外の関東・関西からいらしたお客様は、仙台・山形・盛岡というのは、ひとつのくくりでしか考えていらっしゃらないということを常に感じております。観光マップや観光地の紹介の研修など、自分達の所に特化した形で考えていくのではなく、広域観光で考えていかなければいけないと思っております。

また、今年8月、秋田の大曲で花火大会があり、初めて見に行ったのですが、会場に来ていたお客様に「どちらからいらしたのですか」と聞きましたら、福井からいらしていました。福井から紅花船の航路をたどって秋田まで行って、そこから大曲まで下りてきて、花火が終わったら午前4時に鳴子温泉に入って宿泊。その後南に下っていくというお話でした。我々が忘れていた、紅花船という航路をたどっていらっしゃるお客様もいるということを改めて知り、今回は街道のサミットでそれをご紹介したいと思いました。我々は、新幹線が走りますと新幹線と、

一番早いルートでお客様がいらっしゃると勝手に思い込んでしまうのですが、必ずしもそうではなくて、みなさん個人個人でいろいろな形の旅行の行程を組んでいるということがわかりました。そういう意味では、街道をきちっと整理していき、さらに情報を発信して、こういう楽しみがあるんですよということを提供すれば、街道は鮮やかに甦ると思います。

○三田氏 今の最後の話をほくなりに解釈すると、道路がいろいろあるけれども、それを旅人が行き交えるような街道にしておくことが大切だと理解しました。それでは工藤さん、お願いします。

○工藤氏 今、旅館業界が苦戦を強いられているのは、お客様が団体から個人になってきたためだと思います。100人いれば100通りの選択肢がある。ということは、人気のある温泉場と人気のない温泉場の格差が出てきてしまいます。また自分で選んで、自分で何十万も払うわけですから、その温泉場や旅館に対する期待は、非常に厳しいものになっています。良くて当たり前、自分が払った分の価値は、絶対損したくないという思いで、旅人はいらっしゃるのではないかと思います。そしてまた、その町で楽しもうとする気持ち、体験をしようとする気持ちも高くなっているのではないかと思います。

この点から考えていきますと、上山温泉という個性をはっきりとさせておく必要があるのではないかと思います。町の散策が増えるわけですから、通りを歩いた時に、お客様が、この町は観光者を歓迎しているという表現やしつらえがよく見える町でなければならぬと思います。私達市民も、事業主も、観光業も、みなさんができるような、おもてなしをする表現やしつらえをどこかで施していけないものでしょうか。

上山には数々の本当に貴重な本物がたくさんあります。まず、私達はこの上山をどういう町、温泉場にしたいのか。もう一度考えてみたいと思います。

○三田氏 旅人を歓迎し、もてなすという気持ちが、町の通りに垣間見れるような所であるべきだということ。小さなことを継続して積み上げていくこと。ほくは、後者が山形の観光地づくりに一番欠落しているのではないかと思います。今非常に大切な問題提起があったと思います。それでは須谷さん、お願いします。

○須谷氏 今のお話で、本当にみんな言い尽くされたような気がします。大事なのは、それぞれの町に、それぞれの文化があるように、個性的なまちづくり、宿づくりが大事だと思います。

日本らしさというと、畳や浴衣の文化。和食は、他の国の食べ物に比べて、とても鮮度を重視し、器なども吟味する食文化だと思いますから、どんどん切り捨てていった日本の良さを、もう一度見直す時には、旅館がそういう大きな役目を担うと思います。それには、行政的な支援もないと、難しいという気がします。

それから、温泉疑惑ですが、山中温泉では、温泉は町の人の共有財産ということで、とても大事にしてきた歴史があります。町人が大事にしている温泉を、お安い料金でお客様に提供するわけですから、お客様に温泉を使う時のルールやマナーを守ってほしい。かけ湯をしてから湯船に入るとか、一度洗ってシャワーできれいにしてから入るといことは、本来常識だと思います。そういったことが徹底していけば、私達の未来も明るいし、もっとみなさんが、観光地や温泉を楽しんでいただけるルールができるのではないかと思います。

○宇田氏 私達の温泉は、JR東日本と西日本の境目であることを、みなさん知っているのでしょうか。ひとつのルート、街道でつながるルートが、新幹線ひとつで変わります。例えば開港150周年を下田でやります。その間に何のニュースも入ってこない。天城峠はすごく大事なルートでしたが、その街道ルートに「今ここで何をやっている」「下田で何をやっている」「江戸で何をやっている」というニュースが入ってきたら、私達も協力することができるのに、ポイントをつなぐプロモートができていないような気がします。もっとルートをつなぐような予算とPRの仕方があるのではないかと思います。

私達は置いていかれないように、伊豆半島全域の女将さん達を集めまして、PRと共に、連携をし始めました。バスを仕立てまして、伊豆半島全域の女将さん達が、自分がそれぞれ担当する部署で、女将さんが女将さんにご案内をしたり、日本に在住する外国人の方に、モニターツアーをしながら、通訳をつけて、伊豆半島をご案内する形を取りました。私達もこれから広域的なことを考えなければいけないということで、伊豆のコンシェルジュという意識で、他の旅館も、他の温泉場も売ろうじゃないかと変わりつつあります。

温泉のことは、結構混乱状態にあるということがわかりました。

消費者の意見もありますけれども、さっきおっしゃられたルールやマナーも大切ですし、私達提供する側だけが悪いのではないということも言いたいと思います。情報提供しながら解消したいと思います。

○三田氏 実は、もう予定の時間をオーバーしてしまいました。何か質問やご意見があれば受けたいと思います。どうぞ。

○発言者 工藤さんにお聞きしたいのですが、温泉の状況を見て、どのように考えておられますか。道路の問題も含めて。

○工藤氏 私の所は大型バスが横付けできないので、それで団体さんがいただけないという悔しさが昔はありましたが、逆の発想をすると、歩いていただくという発想も良かったのかなと思います。歩いて、風情の感じられる数百mであれば、お客様は苦にならないだろうし、逆にそれが思い出として心に残るものだと思います。市民の方が生活する便利で安全な道路はもちろん必要ですが、車が主人公の道路ではなくて、人が主人公の道路も、これからは必要じゃないかと思います。

○発言者 まちづくりに興味があるのですが、利害関係が反する人を、説得しながらうまくやっていく方法があったとすれば、教えていただきたいと思います。

○須谷氏 確かに、難しいと思います。ひとつのテーブルに近づけるために、私達は3月に植樹祭をしまして。桜を植えながら、まちづくりを語りました。また、観光協会の中に女性部を組織し、孫、子どものために女がひとつの理念で語っていこうと、私達旅館の女将の会、商工会女性部、婦人連絡協議会が参加しています。全町女性を網羅することで、町の将来を語っていく時に、初めてひとつの大きな方向が見出されると思っています。

○三田氏 他の分科会が全部終わってしまっているそうなので、まとは全体会議の中の、報告という形で代えさせていただきたいと思います。ありがとうございます。

分科会報告会



志賀 秀一

進行

実行委員会代表幹事
上山まちづくり塾 塾長

志賀 秀一

○志賀氏 ただいまから、各分科会で行われた議論の報告会を始めさせていただきます。それではさっそく、第1分科会の案内人をしていただいた柴田先生から順にお願いいたします。

○柴田氏 第1分科会でのテーマは、「道でつなぐ、道で結ぶ—街道から快道へ」です。3人それぞれ個性あるお話をいただいたのですが、ひとつ共通しているのは、具体的にそれぞれ組織の維持、活動についてはそれぞれ大きさと活動内容によった工夫をされているという話がありました。それからもうひとつは、それぞれについて、活動の成果がわかるような形の工夫をされているということです。そういうことから、活動をする上で成果の見えることが非常に重要だと思っております。このテーマである「道でつなぐ、道で結ぶ」というのは、何をつなぎ、何を結ぶのかということですが、それについては、自分達の住んでいる地域の、自分達の暮らしをつなごうということです。自分達の住んでいる地域は、自分の顔が自分で見えないのと同じように、地域を知るためには、他の所との交流が必要だろう。交流することによって、地域の自分の姿がわかる。それによって、交流すればするほど、地域の特性が見えてくるのではないかと。つまり、個性ある地域を作るということは、交流することだ。そのためには、いろいろなネットワークをもって、いろいろな所との交流が必要。そういうことから、街道も1本の道ではなくて、ネットワークという形で、いろいろな所と交流できることが、個性ある地域、誇りの持てる地域を作る第一歩ではないかという話になっております。活動を進めていく上で、非常に重要なことは組織の維持。組織の維持には何が重要かという、人間の信頼関係。この信頼関係がなければ、広域的な連携の活動は難しいのではないかと。それぞれが維持できるた

めには、成果が見えるようにすることも必要ではないかという話がありました。これからの道を結ぶものは何かということで、基本的に自分達の誇りを見つけること。自分達の地域に、どういう誇りがあるかを見つけることではないかと感じました。

○宮原氏 私共の方は、「街道・宿場を活かした地域づくり」というテーマで話をさせていただきました。一番最初は、地域づくりについて、いろいろ意見が出ました。ひとつは、地域づくりで住んでいる町の住み手の側と、行政の関係についていろいろな疑問が提示されました。もう少し地域の人達が主体となったまちづくりが必要でないかという意見が出ました。行政に頼らなくても、自分達が県境を越えてひとつであるということ、その中で様々な交流の活動をすることが大変気持ちがいいというお話があったり、それから自分達は自分達のことでやりましょう、同意するような人を探して、一緒に何かやるのが大切だろうと、私達地域にいる人達がどう活動していくかをみなさんと話し合いました。それから街道・宿場という古い歴史を残すことについても、やはりまちづくりの中では、古い景観は大切だし、残すべきだという議論はよく聞きますが、自分の家がそれを残していけるのかといった時には、なかなか残す方向にはいかないといった矛盾も指摘しながら、私達が持っている歴史遺産がもしなくなってしまったら、それは地域が記憶喪失になったのと同じようなものであるから、私達が生きていく上で大切なこういった歴史を、やはり未来に引き継いでいくべきではないか。単に古い街道、古い宿場、古い歴史という視点からではなくて、それを新しい価値観で地域に取り込みながらつなげていくべきではないかというお話をいただきました。

○高峰氏 「食文化と街道」というテーマですが、「食材に旅をさせない、人に旅をさせろ」というスローフードの活動をされている方と、旅をし続けたぶり・にしん・たらの歴史的なものを再評価しながら新しい事業に取り組んでいるお二人の方との非常にワイルドな議論の場になりました。結論から言いますと、一緒だという話です。食材に旅をさせないといっても、移動している現実がございます。食材に旅をさせない比率をいかに下げていくか。いかに地域に人が来ていただけるような仕組みを作っていくかということが重要なのではないかと。ポイントとして出されました。そのためには、地域の中だけのみなさん方がいろい

ろな議論、再評価をされるということだけではなくて、可能な限り、地域外からいろいろな方を招いていただき、多様な視点から地域の歴史なり文化の再評価をしていただく。それが街道という概念でこういう事業に取り組んでいただく意義ではないかということです。それぞれの地域に相互に訪問し合い、当事者からいろいろな話を聞きながら、可能性を一緒に探っていく。そういうことを、こういう場にお集まりのみなさんが、このような機会をひとつのきっかけとして、継続的にやっていくということが重要であるという気がします。それともうひとつ、これをきっかけに新たな街道、新たな道づくりをぜひ目指していただきたいということ。今は外から海外からいろいろなお客さんがお見えになる。ですから、街道という切り口で食にアプローチするにしても、そういう多様な人の動き・物の動きがあるのだと、再度見つめ直してそれを今後どのように重層的に積み上げていくかがこれからのテーマになるのではないかとこのまとめをさせていただきました。

○村山氏 テーマは「出羽(いでわ)、みちのく街道と旅人」です。一つは旅人の交流による地域づくり。旅人の紀行にみる感動や知恵を活かす地域づくりということですが、これは街道交流会議の「交流」という言葉に要約されます。どういうことかと言いますと、東北以外の地からやってきた旅人が残した記録を中心に、足あとをたどってみる。やはり紀行文を持参して現地を歩き、その感動を追体験することが大切であるということが確認されました。また、菅江真澄という人物を世の中に発掘したのは、実は柳田國男であったという話がございます、柳田國男は民俗学の父と言われていますが、彼が「菅江真澄こそは、民俗学の祖である」と称えた話が紹介されました。また、旅人を介して、その出身地と旅先地の間での地域交流運動が提起されました。

今回私なりにリストアップしたみちのくの旅人は、松尾芭蕉、中山紅葉、菅江真澄、古川古松軒、高山彦九郎、伊能忠敬、野田泉光院、十返舎一九、熊谷新右衛門、吉田松陰、養虫山人、そしてイザベラ・バード。あと、子規、与謝野晶子、ブルーノ・タウト、柳田國男など続きますけれども、こういう様々な先人達が残した記録をもとに「先人学習ウォーク」をしたり、「旅人交流マップ」づくりをしたりすることから、新しい地域づくりの糸口が見えてくるのではないかと思います。

○三田氏 どここの温泉地も今は危機、あるいは転換期にあるという

ことが異口同音に出了。だまっけても団体客が入ってきた時代から、個人客中心の大変厳しい時代になってきている。お客さんが大幅に減少し、町がさびれてきている。その中で各温泉地が今までは個別でいろいろやっていたけれども、それだけでは対応できないということで、観光地、温泉地単位で共同の取り組みを始めている。町並みづくり、通りづくり、花による取り組み、地域あげてのイベント、もてなし。そういった取り組みが起きていて、そのためには事業者や住民との連携が欠かせなくなってきたということです。2つめは、広域的な取り組み。自分達の地域もそうですが、広域に対する情報が欠落しているという反省もありました。すでに山形・宮城でも、また伊豆全体でも取り組みが進行しているようです。それから、温泉疑惑への対応という課題があり、そのための情報公開はもちろん必要ですが、もう一方では利用者に温泉利用の作法を理解していただくことも必要だということでした。私の独断になりますが、今回は街道ということでもありますので、街道を旅していた昔の旅人が体感したような思い、イザベラ・バードが米沢平野に着いて書き綴った文を見ますと、大変感動に満ちている。つまり、かつての街道は、感動を体験する場であった。ところが最近ではそれが物理的に車が走る道路になりつつあって、感動が薄れているのではないかと。温泉地でのいろいろなサービスの向上、PR、プログラムも大事だが、かつてのような感動を発見できるような環境づくりが大切です。昨今はそのための地道な努力が今まで欠けていたのではないかと思います。

○志賀氏 ありがとうございます。分科会での雰囲気などおわかりいただけたと思います。今日は基調鼎談から最後まで拝聴して思いましたのは、人にやさしくしていると100年200年後に何かいいことがあるということがわかりました。やはり先人の方のいろいろなものによって、私達も生かされている。大切なものをいただいているということなのだということに気づかされます。もうひとつは、よその地域とつながっていく力があるかどうかが問われている。最後に、道というのは使う人と守るあるいは支える人がいる。そういう方の力がうまくつながることによって、いろいろな力が生まれてきて、それが観光になったり、文化になったりという可能性を持つものだと感じました。

次期開催地紹介



全国街道交流会議 代表幹事
藤本 貴也

○藤本氏 お忙しい中お集まりいただきましてありがとうございます。全国街道交流会議上山大会の開催に際しご尽力をいただいた上山の実行委員会のみなさんに心から御礼を申し上げます。さて次回ですが、前回富士川大会が終わりました後、いくつかの地域から自薦他薦ございまして、事務局でいろいろ検討させていただき、今朝ほど全国街道交流会議の総会にお諮りしたところ、ご賛同をいただきましたので、今回は松山にお願いをしたいと思います。四国は4つの国でございます。街道をきっかけに、ぜひ四国が1つになるようにという願いを込めまして、ご紹介を申し上げます。

○司会 それではここで全国街道交流会議、全国大会上山大会、大会旗の引き継ぎを行います。では、次回開催地松山市よりお越しの皆様を紹介いたします。松山市参与、森岡覚様、松山市都市整備部企画官、片山正直様、四国経済連合会、飯田豊彦様、四国経済連合会、小原正昭様。大会旗は阿部市長より、松山市参与、森岡覚様に手渡されます。今しっかりと、次回開催地松山市に、全国街道交流会議の大会旗が手渡されました。それでは、松山市の紹介を、皆様よろしく願いたします。

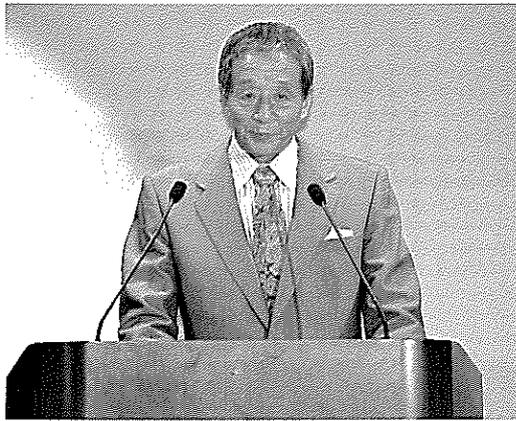
○森岡氏 ただ今ご紹介を受けました松山市参与の森岡でございます。本日は、全国街道交流会議第3回全国大会上山大会が、このように盛大に開催され、心からお祝いを申し上げます。また、ただいま次回開催地として松山市をご決定いただきまして、誠にありがとうございます。50万市民が、みなさんのお越しをお待ちいたしておりますので、ぜひとも松山市へお越しいただけますよ

うお願い申し上げます。

それでは松山市の紹介をさせていただきます。松山市は愛媛県の中央部に位置しまして、自然豊かな所で、年間約500万人の観光客が訪れております。松山城がちょうど街の中心部にございまして、城下町として発展してきました。この松山城の東側に道後温泉がございます。松山市沖の瀬戸内海は波静かで温暖で、瀬戸内海国立公園になっておりまして、釣りの盛んな所でお魚も大変おいしい所でございます。道後温泉本館の建物は温泉施設としまして、初めて国の重要文化財の指定を受けております。また、俳人で有名な正岡子規の生涯をテーマとしました子規記念博物館もでございます。また、松山が舞台となった夏目漱石の小説「坊っちゃん」に登場しました、坊っちゃんやマドンナ、赤シャツに変装した観光案内人が観光案内をしています。

最後になりましたが、松山市は、日本で唯一、環境都市として世界的に有名なドイツのフライブルグ市と姉妹都市を締結しております。また、作家司馬遼太郎先生の小説で松山を舞台にして書いた「坂上の雲」にちなんだまちづくりを進めております。以上で、松山市の紹介を終わります。





宣言者
俳優
田中 邦衛氏

○司会 全国街道交流会議、第三回全国大会、羽州街道・上山大会「山の向こうのもうひとつの日本」と題しまして、本日、基調鼎談と5つの分科会を進めてまいりました。そのしめくりといたしまして、これより、「東北街道交流連携会議の呼びかけ宣言」に移ります。

ただいま、ステージ上に登場していただきましたのは、「東北街道交流連携会議」設立の呼びかけ人、そして未来を託す若者の代表、上山明新館高校のみなさんです。

それでは、皆様が揃ったところで、宣言をお願いいたしますのは、俳優の田中邦衛さんです。それでは田中さん、お願いいたします。

○田中邦衛氏

東北街道交流連携会議、呼びかけ宣言

『東北を旅した松尾芭蕉、古川古松軒、菅江真澄、さらに「東洋のアルカディア」と表したイザベラ・バードや「山の向こうのもうひとつの日本」と言った故エドウィン・ライシャワー氏など、多くの優れた旅人たちは、ここに古代から脈々と受け継がれた縄文の血と風土を感じたのかもしれない。

街道は多様性豊かな「いくつもの日本」を繋いできた。互いの異なる文化を認め合い、出会い交流することで、さらに多様な文化が生まれる。

城下町、宿場町、温泉町という3つの顔を持つ羽州街道の上山市を舞台に、東北そして全国から語り部たちが集い、街道を繋ぎ結んできたいくつもの《くに》の歴史、文化、風土について語り合った。

東北はもはや、道の奥に広がる辺境ではない。それは今、可能

性の大地として発見されようとしている。

地域自らが将来像を描かなければならなくなっているとき、東北が先駆けて、「山の向こうのもうひとつの日本」を甦らせ、街道で繋ぎ、結び、広く全国に伝播することを願って、「東北街道交流連携会議」の発足を宣言し、志を同じくする人に参加を呼びかける。

一つ、東北。静かに自らの足下をみつめ、眠れる風土を掘り起こそう。

一つ、東北。自らの歴史、文化、風土に誇りを持つ。それを磨き、育て、可能性の大地として、子供たちに伝えていこう。

一つ、東北。山の向こうのいくつもの《くに》を、^{みち}街道で繋ぎ、結び、開き、美しくしなやかに《くに》おこしを始めよう。

一つ、東北。三内丸山遺跡の路傍の墓は、道のはじまりを語る。もう一度道の持つ意味を考え、道を守り育て、おこし、豊かな道を楽しもう。

一つ、東北。今日この場所に集う人自ら 過去と未来を繋ぐ道に大きな一歩を記そう。

平成16年10月15日

全国街道交流会議 第三回全国大会 羽州街道・上山大会にてここに宣言する。

宣言人 田中邦衛。』

○田中氏 大好きな山形からこうして呼んでいただいて、本当にしあわせな出会いです。ありがとうございました。

○司会 以上を持ちまして、全国街道交流会議、第三回全国大会、羽州街道・上山大会を終了いたします。ありがとうございました。皆様、また来年松山でお会いいたしましょう。

上山大会で広がるネットワーク

東北ではじめて羽州街道の上山市で全国街道交流会議を開催することにより、全国に東北、山形県の上山市そして地域をアピールし、それぞれの地域や団体の地域づくり活動が前進するためのステップとする。また、今まで失ってきた日本人の大切にしてきた伝統が、「山の向こうの」東北には息づいていることを参加者に実感していただき、日本におけるこれからの東北の役割を自他ともに認識する場とする。

そして、全国的交流を通して上山を発信源とする全国的ネットワーク、特に県内や東北での広域的な連携をつくり、継続的交流のきっかけとする。



実行委員会設立総会

さらに、他地域からの情報享受や地域の魅力の再確認により、郷土への愛着心を強め地域づくり活動に携わる方々の一層の連携と成長を促し、市制施行50周年の節目に、上山市民一丸となって「住み良いまち、住みたいまち上山」をつくっていく。

以上のことを地元としてのねらいとして、平成16年1月から3回の準備会を経て3月22日に100人を越えるメンバーで実行委員会を設立し、企画と準備を進めました。

実行委員会を7月と11月の合わせて3回開催し、具体的な内容は渉外広報部会、全体交流部会、もてなし部会、湯ったりまち歩き部会、宿泊案内部会の5つの専門部会がそれぞれ何度となく独自の会議を持って、時には懇親も含めながら話し合いを行いました。専門部会では、「次につながるものを残そう」、「連携から協働の芽をつくろう」、「地域づくりは仲間からみんなへ」を合言葉に取り組みを行いました。

渉外広報部会は、多くの方々から参加いただくにはどうい



手づくり詰め所看板

ところに、どのようにお知らせするか検討し、県内や隣接県での催し物に出かけて行ってチラシを配布しました。事務局も兼務し、全体運営や会議の開催、参加者募集の発送・集約

と多方面にわたりました。

全体交流部会は、地元の食材と手づくりにこだわり、上山のそばは自分達で作ったものを食べてもらおうと、畑を借りて種蒔きから雑草取り、



7月10日にそば蒔き

収穫まで実行委員の手で行いました。おにぎり、いも煮、漬物、果物、ジュース等すべて地場産のものを使用し、上山をおいしく味わっていただこうと取り組みました。

もてなし部会は、参加者が来てよかったと思って帰ってもらうには、どのようなもてなしをしたらいいか検討し、温かく迎え送ることに重点を置いて、かみのやま温泉駅では花笠踊りでの出迎え、地場産物の直売で見送りをしました。また、市内の要所には手づくり看板をつけた赤と白のそばの花で歓迎をしました。夜なべ談議の持ち方についても検討し、担当者の打ち合せを行いました。

湯ったりまち歩き部会は、まち歩きのコースをどう設定するか、どのように歩いてもらうか、交通手段や料金設定、多くのボランティアの力をどう活用するか等を検討し、コースの事前調査、関係者との打ち合せを行い、コースを決定しました。楯下と金瓶地区では地域が一体となって独自の話し合いを持ち、趣向をこらした案内やもてなしがなされました。

宿泊案内部会では、事前の宿泊施設と交通手段の確保をはじめ、参加者の宿泊受付・部屋割りや旅館との調整など、短期間の中で何かと労の多い準備と運営を行いました。

そして、3月から10月の準備のなかで、今大会のテーマの一つである、「英国の女性旅行家イザベラ・バード」及び「羽州街道と楯下宿」を市民の方々と一緒に学習し、大会を成功させようと事前学習会をそれぞれ開催しました。また、市内外に全国街道交流会議上山



7月25日のイベント

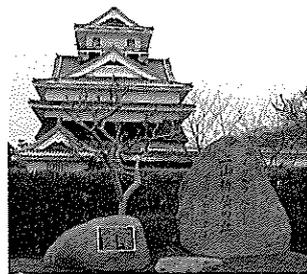
大会をアピールするためにプレイベントとして「ひまわり街道迷路スタンプラリー」を、上山を花でいっぱいにする会及び上山麵類食堂組合との共催で350人の参加で開催しました。

大会間近に迫った9月下旬に参加者の申込数は150人弱でした。私達は、これだけお知らせしたのだから参加者はひとりで集まるだろうと思っていましたが、600人の目標に対しこのままでは200人にも及ばないという状況に愕然。実行委員会の志賀代表幹事から叱咤激励を受け、それぞれの機関で参加者の声かけを行い、特に上山市民に参加してほしいと呼びかけを行いました。短期間ではありましたが、この呼びかけに多くの方が応えてくれて、当日は850人の参加者でいっぱいになりました。翌日の湯ったりまち歩きも予定数の参加があり、それぞれのコースを楽しんでもらいました。参加者から、分科会、交流会、まち歩きなどどれもすばらしいものであったという反響がたくさん寄せられました。



記念の桜を植樹

大会終了後の10月30日には、この大会の意義を忘れず上山の地域づくりを進めていく証として、全国街道交流会議上山大会開催記念の桜を1本、最上川さくら回廊事業により茂吉記念館の近くに植樹しました。また、この大会でイザベラ・バードとの出会いがあった上山造園緑化協同組合が12月30日に、組合20周年記念事業と併せてイザベラ・バード没後100周年の記念碑を、かつてバードが歩いたと言われている蔵王を仰ぐ月岡の丘に建立しました。



イザベラ・バードの記念碑

大会を終えて、ここまでやればという計画はほぼ実施できたと思っています。反省点も多々ありますが、実に多くの団体や市民の方々、ボランティアの方々が結集し、自分達の活動として取り組みをしました。これだけの結集はべにばな国体以来のことであり、「上山も捨てたものではない。大したものだ」という自信を強めました。内的には、活動団体の出会いの場となり、これから連携や協働へつながるいい機会となりました。全国や県内の方々、そして上山市民がたくさん参加され、



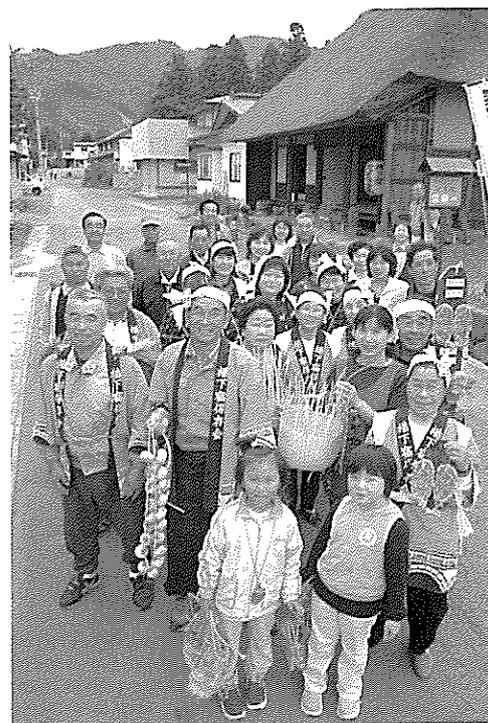
12月 楳下と金瓶地区の交流会

上山の良さを発見し再認識しました。対外的には、東北や上山を全国的にアピールでき、その評価を一段と高めました。早速リピーターが訪れるという状況になっています。東北地

方内でもネットワークづくりの絶好の契機となり、あちこちで様々な形態の連携が生まれようとしていますし、東北の街道宣言で呼びかけしたように、東北で街道のつながりや交流を継続していく組織をつくるため、新たな地域づくりの一步を踏み出すことができました。

大会参加者や関係者の皆様から、たくさんのご支援・ご指導をいただき、今大会を成功裏に終了することができましたことに厚く御礼申し上げます。

羽州街道・上山大会実行委員会
事務局長 山口 登市



一つ、東北。静かに自らの足下をみつめ、眠れる風土を振り起こそう。

一つ、東北。自らの歴史、文化、風土に誇りを持つとう。

それを磨き、育て、可能性の大地として、子供たちに伝えていこう。

一つ、東北。山の向こうのいくつもの《くに》を、街道で繋ぎ、結び、

開き、美しくしなやかに《くに》おこしを始めよう。

一つ、東北。三内丸山遺跡の路傍の墓は、道のはじまりを語る。

もう一度道の持つ意味を考え、道を守り育て、おこし、豊かな道を楽しもう。

一つ、東北。今日この場所に集う人自ら、過去と未来を繋ぐ道に、

大きな一歩を記そう。

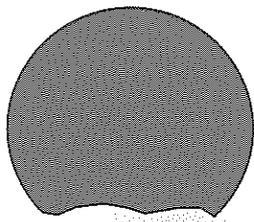
平成十六年十月十五日

全国街道交流会議 第三回全国大会 羽州街道・上山大会にて

ここに宣言する。

宣言人 田中邦衛





上山市制施行五十周年記念 全国街道交流会議第三回全国大会

羽州街道・上山大会

開催報告書

発行日 平成17年1月

発行・監修 全国街道交流会議
羽州街道上山大会実行委員会

印刷 藤庄印刷株式会社

